

第2章

特別名勝及び特別天然記念物 上高地の概要

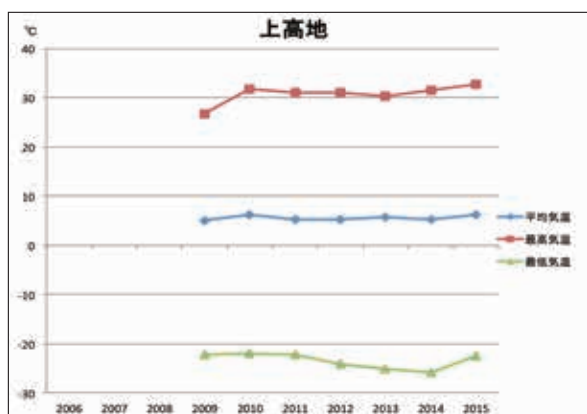
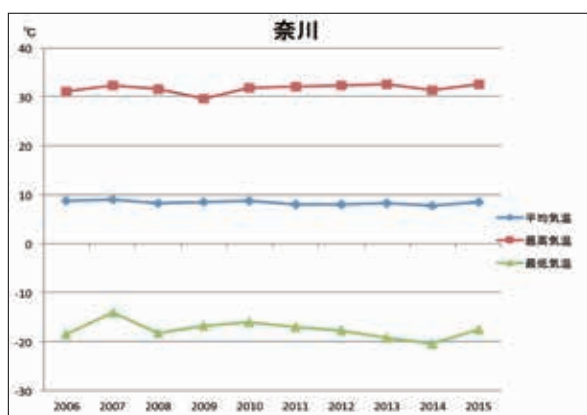
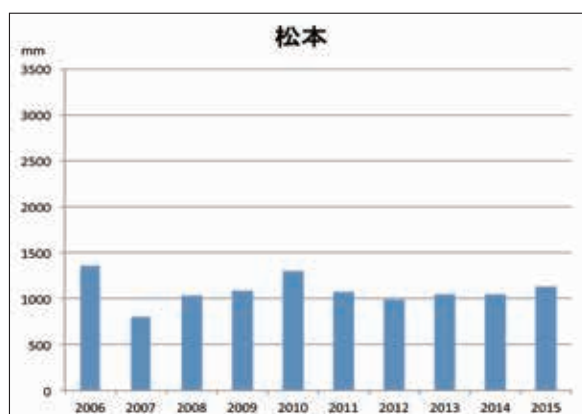
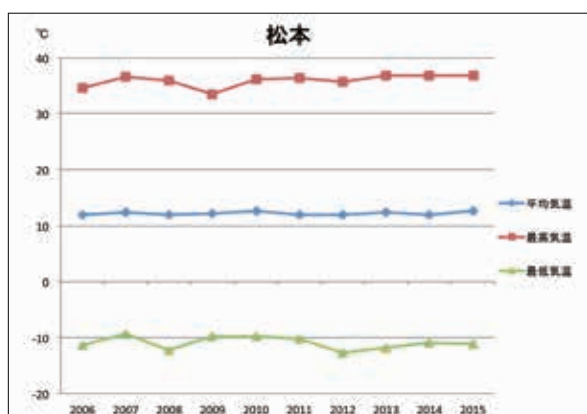
- 1 気象
- 2 地形・地質
- 3 歴史
- 4 土地所有
- 5 法規制
- 6 指定地内の文化財等
- 7 観光の動向
- 8 祭礼や催し
- 9 施設等

第2章 特別名勝及び特別天然記念物上高地の概要

1 気象

本地域及び周辺（松本、奈川）における平成18（2006）年～平成27（2015）年の10年間の気温（平均、最高、最低）の推移を図2に、降水量の推移を図3に示します。各観測は気象庁によるもので、観測地点の標高は、松本610メートル、奈川1,068メートル、上高地1,510メートルです。ただし、気象庁による上高地の気温計測は、昭和50（1975）年10月から行われていないため、信州山の環境研究センターによる観測データ（観測地点の標高1,530メートル）を用いました。

上高地の降水量は年間2,500ミリメートル前後あり、3,000ミリメートルを超える年もあります。松本と比較するとおよそ倍の降水量です。本地域の平坦部では、冬期の好天時には放射冷却により氷点下25度以下に冷え込むことがあります。



資料：松本・奈川－気象庁 HP より
上高地－信州山の環境研究センター提供

資料：気象庁 HP より

図2 気温の推移

図3 降水量の推移

2 地形・地質

本地域の西部には、北アルプス最高峰の奥穂高岳（標高3,190メートル）を中心とする山稜が南北に走り、ここには涸沢岳（3,110メートル）、北穂高岳（3,106メートル）、南岳（3,032.9メートル）、中岳（3,084メートル）、大喰岳（3,101メートル）など、3,000メートルを超える高峰が連続し、一般に北方の槍ヶ岳（3,180メートル）を含め槍・穂高連峰と呼ばれています。槍・穂高連峰の形成には、175万年前頃に存在していたカルデラ火山が関係しています。また、柱状節理の発達した穂高安山岩類が、山岳氷河による氷食作用を受け、更に崩壊を繰り返したため、山稜は一連の峻厳な岩稜・岩峰を構成しています。

奥穂高岳の東方には屏風の頭（2,565.6メートル）から前穂高岳（3,090.5メートル）を経て明神岳（2,931メートル）に至る山稜が走り、奥穂高岳とは吊尾根を介して連結しています。屏風の頭北西には、高度差600メートルに達する日本有数の大岩壁「屏風岩」があり、屏風の頭から前穂高岳に至る尾根は鋸歯状の岩峰が連立する特異な地形を示し、各岩峰には前穂高岳（Ⅰ峰）から順にⅧ峰までの名称が与えられています。同様な岩峰は明神岳の南側にも認められ、同じく明神岳（Ⅰ峰）からⅤ峰の名が付けられています。これら岩壁や岩峰群の多くは山岳氷河による氷食作用の産物です。

槍ヶ岳から奥穂高岳までの山稜はほぼ南北に連続し、その南方で向きを北東－南西方向に変え、西穂高岳（2,909メートル）に連なります。西穂高独標付近まで連続した岩稜は穂高安山岩類から構成されていますが、これから南西の山稜は滝谷花崗閃緑岩の分布域となり、穏やかな地形を示します。この山稜の延長上には焼岳火山群が位置しています。本地域の特徴である上高地の平坦部は、焼岳（2,455メートル）火山群の更新世中期の末から始まる活動により、それまで上高地付近から西へ流下していた古梓川（以下上高地―穂高岳付近から焼岳付近を南西へ流れて流入していたと考えられる河川を「古梓川」という。）が堰き止められたことにより形成されました。

東部から南部にかけての山稜は、北の大天井岳（2,922メートル）、常念岳（2,857メートル）、蝶ヶ岳（2,677メートル）から霞沢岳（2,645.8メートル）まで南北から北東－南西方面へ屈曲しており、尾根上に平坦な地形が残存しています。常念岳と霞沢岳の一部は花崗岩などの火成岩類で構成され急峻ですが、そのほかの平坦面をなす山稜は美濃帯中生層の分布域となっており、地質の違いが地形に反映されています。

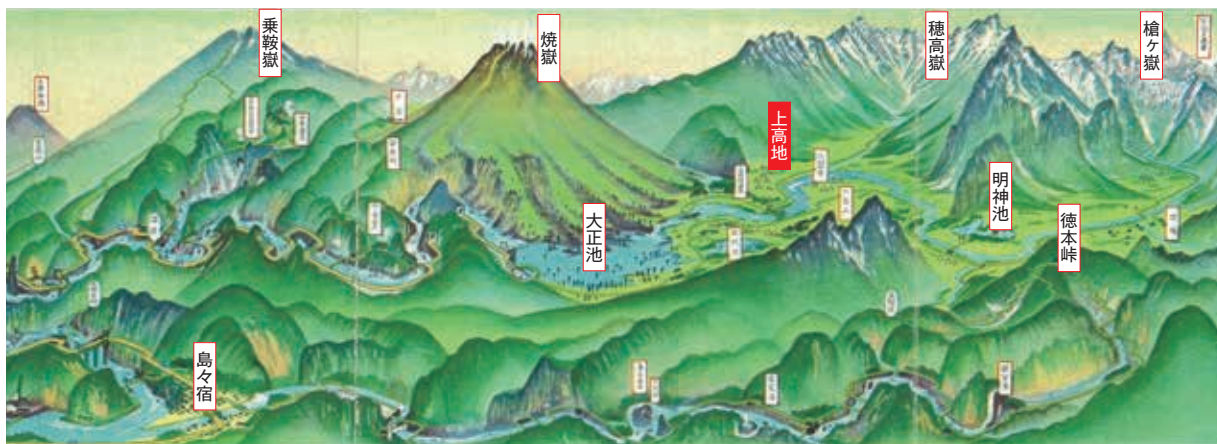


図4 山岳概要図

3 歴史

本地域の利用状況、登山史等の概要は以下のとおりです。

(1) 上高地へのルート



吉田初三郎「上高地鳥瞰図」の一部（昭和5年、主婦之友八月号付録『日本八景名所圖繪』より）

ア 徳本峠越え

上高地に最初に分け入ったのは、おそらく杣こまと呼ばれる樵を生業とする人たちだったと思われていますが、当然のことながらその最初を記録するものはありません。

その後、杣によって踏まれた道が徐々に知られるようになっていったと考えられますが、過去の文献によりそれが確認できるのは、天正13（1585）年の飛騨国の領主である三木秀綱の敗走です。現在の高山市内にあった松倉城が、豊臣秀吉配下の金森長近に責められ落城し、城主の三木秀綱は奥方を連れて信州へ落ちのびました。夫妻は途中で別ルートを取り、奥方は中尾峠から上高地に入り徳本峠を越えて島々谷を下ったところで杣人に殺され、秀綱は中尾峠から白骨、大野川を経る鎌倉街道を進み、角ヶ平で殺されたと天保9（1838）年の木曾巡行記に記されています。三木秀綱の敗走が事実か否かはともかく、中世末期には既に中尾峠から上高地を経て徳本峠を越えるルートは知られていたことがわかります。

島々から徳本峠までのルートは、谷川沿いであり洪水時は不通となることから、島々村の背後から尾根伝いに小嵩沢山の南面を経て徳本峠に至る道を開通させたことが、慶応元（1865）年の島々村奥原作左衛門の日記に記されています。更に明治3（1870）年には、水殿川を遡り尾根を越えて上高地に入る水殿川新道を開通させましたが、明治8（1875）年に廃道となっています。

徳本峠越えの沢沿いのルートは、明治に入りウェストンも歩き、北アルプスに登っています。

イ 大滝山越えのルート

近世までのもう一つのルートは、安曇野市三郷小倉から大滝山を越えて徳沢へ下る道が知られています。

上高地の名は、正保3（1646）年の正保の国絵図（松本御領分図）に上河内川と記

されたのが文献に現れる最初であり、延宝4（1676）年の甕忠左衛門日記に上河内の記載があります。享保9（1724）年に松本藩が編纂した『信府統記』には神合地と記載されています。穂高神社奥社造営の最初がいつか不明ですが、明和7（1770）年には造営するようになっていたようです。

穂高神社の奥社からの神迎え神事は、寛政元（1789）年の『御嶽御造営目録』によれば、蝶又岩小屋（大滝山と蝶ヶ岳の間）に一泊し、徳沢に下る杉村小屋で昼食をとって上高地に至り、帰路は徳本峠から島々のルートを使っています。

槍ヶ岳開山で知られる播隆も、文政から天保年間（1820年代後半から1830年代）にかけて冷沢から鍋冠山、大滝山を経て上高地に至り、槍ヶ岳登頂を果たしています。

ウ 飛騨新道（小倉新道）

飛騨高山と松本を結ぶ道は、橋場、稲核、入山、角ヶ平、祠峠、大野川、安房峠から高山に至る飛騨街道と、木曾谷から藪原、寄合渡、野麦峠から高山に至る野麦街道がありました。寛政2（1790）年に幕府の政策により同一方面への重複する街道が廃止され、野麦街道一つに改められました。このため岩岡村の伴次郎、小倉村の又重郎らが、小倉村から黒沢、鍋冠山、大滝山から徳沢に降り、上高地内を梓川沿いに下って中尾峠を越えて飛騨に入るルートを開設するよう幕府に願い出ました。前述の大滝山越えと、三木秀綱奥方が通った中尾峠越えを合わせたルートです。杣が使う道を使用し、工費も村々で負担するので幕府の負担は求めないという申し出で、幕府の許可を受け天保6（1835）年に開通しました。しかし、冬期は積雪のため不通となり、期待された信州側の米や北陸の海産物の流通は少なく、万延元（1860）年の暴風雨で被災し、復旧の見込みが立たず廃止されました。

エ 旧鎌倉街道を利用したルート

この他に、大野川から白骨を経て、焼岳南面を通過して上高地に入るルートがありました。前述の三木秀綱がたどった鎌倉街道と重なっています。この道は主に大野川村の御用杣たちが使用したと言われています。

オ 釜トンネル及び上高地トンネルの開通

大正時代後半になると、梓川流域に水力発電所が次々と建設されるようになりました。発電所の建設には資材運搬用道路の開設が必要であり、発電所の竣工はその地点までの車道の開通を意味しています。

当時の梓川電力株式会社（後に東京電力に再編）は、霞沢発電所建設に伴い大正池から7.6キロメートルほど下流の沢渡へ隧道による導水路を建設しました。この発電所の営業が開始されたのは昭和3（1928）年ですが、これにより釜トンネルが開通し、沢渡から大正池畔までの車道が整備されました。釜トンネルの当初の規模は、高さ・幅ともに狭いものでしたが、徐々に改良され、小型バスが、昭和8（1933）年には大正池まで、昭和10（1935）年には河童橋まで乗り入れるようになりました。

当初の釜トンネルは、上高地側の出口は現在と同じですが、中の湯側の入口は現在より

300メートルほど上部にありました。この間は梓川左岸沿い道路を通行していましたが、バス乗入れが始まったばかりの昭和9（1934）年に大雨のためこの左岸道路が決壊しました。このため釜トンネルを中の湯側に延伸する工事が行われ、昭和12（1937）年に完成し510メートルとなりました。

平成14（2002）年に釜トンネルの上高地側に全長605メートルの釜上トンネルが開通し、平成17（2005）年には705メートル延伸し、併せて1,310メートルの現在の釜トンネル全線が開通しました。更に、平成28（2016）年7月には釜トンネルの上高地側に全長588メートルの上高地トンネルが開通しました。

(2) 山岳信仰

ア 神が住む山、人の住む里

日本人の宗教観を、世界のそれに当てはめることは難しく、外国人に、「日本人は無宗教だ」と言われることも少なくありません。だからと言って信仰心がないわけではありません。私たちは、山と海からたくさんの恵みを得て暮らしてきました。そのことは、『海幸彦と山幸彦』の神話として、日本人なら誰でも知っています。その中で、海も山の恩恵を受けていることが暗示され、山幸彦が日本人の祖として描かれています。

水を始めそこに住む魚、木とそれがもたらす落ち葉や薪、森に住む動物たち、更には鉄や銅などの鉱物に至るまで、山は私たちに様々な恵みをもたらしてくれます。そんな山には、神が住むに違いない、昔の人はそう考えました。やがて、山に祠を築き、神様を祭り感謝するようになります。日本古来の信仰である山岳信仰の原点がここに 있습니다。

特に秀麗な山が信仰の対象とされてきました。その代表が富士山です。全国各地の秀麗な山々が、「〇〇富士」の名で呼ばれるのはその表れです。例えば、津軽富士と呼ばれる岩木山の山麓には岩木山神社があります。信濃富士と呼ばれる有明山は、享保6（1721）年に地元板取村の行者ぼうじゅういんゆうかい宝重院宥快らによって開かれ、山麓に有明山神社が祭られています。

また、大和の大神神社は、三輪山をご神体とし、今も本殿を持たない神社として知られています。山は、私たちに様々な恵みを与えてくれる神の住むところとして、人々の崇拝の対象とされてきたのです。信濃国一之宮の諏訪大社もその一つで、本殿がないことで知られています。上社前宮は御山（守屋山）を拝するように配置されており、本宮も元は守屋山を拝するように配置されていたのではないかと考えられます。一方、下社は御神木を御神体としており、春宮は杉、秋宮は櫟を祭っています。ここからは、上社は山ノ神、下社は農耕神という性格の違いが見て取れます。集落が祭る山ノ神も、春になると里に下りてきて農耕を見守り、収穫が終わると山に帰っていくという神去来の考えがありました。

イ 修行の場としての山

有史の時代になると、それまで神の住処として畏れ崇拝されてきた山に、人が足を踏み入れるようになります。修験道の開祖と言われるえんの おづの役小角が、7世紀の中頃に吉野の金峯山で蔵王権現を感得したとされます。修験道は、山中の神が宿る磐座などで鍛錬し、神の験力を授かることを目的とする修行の道です。その後、立山（佐伯有頼、701年）、白山（泰澄、717年）、日光（勝道、782年）といった地方の霊山も、修行の場として開か

れていきました。これらの山を開いた人を修験者といいます。

一方、仏教でも8世紀の末から9世紀の初頭に向け、最澄が比叡山に延暦寺を、空海が高野山に金剛峰寺を開き、山中での修行を行うようになります。松本市内田の真言宗寺院の牛伏寺には、鉢伏山に宿る鉢伏権現のご神体と言われる蔵王権現の木像（長野県宝）があります。このことは、当時の信仰には仏教や修験道という枠がなく、神道も含めて一体の宗教世界を構成していたことを示しています。

山に宿る神を蔵王権現と考えることは全国に広がっていきました。宮城県と山形県の境にそびえる蔵王連峰も蔵王権現が鎮まる山で、宮城県側の刈田嶺神社（江戸時代までは「蔵王大権現」と呼ばれた。）に蔵王権現が祭られています。この蔵王権現は、里宮との間で春と秋に遷座が繰り返されますが、春に山に登り秋に山を下るのは、先の農耕神の神去来とは異なり、修験者の守護神としての性格が見て取れます。

ウ 松本地方への波及

美ヶ原の前峰「王ヶ鼻」も、蔵王権現の鼻がその名の由来であり、修行の場となった山であることを示しています。この名は正保の国絵図にすでに見え、遅くとも17世紀の中頃には、美ヶ原は山岳信仰の霊場となっていたことがわかります。では、それはいつ頃までさかのぼるのでしょうか。同じ筑摩山地の美ヶ原の南に鉢伏山があります。その名のとおり、鉢を伏せたような緩やかな山容ですが、この山も山岳信仰の霊地です。牛伏寺に蔵王権現の木像があることは先に記しましたが、この像は、平安時代末期の12世紀頃の作とみられており、山腹の堂平の発掘調査から9世紀後半に活動が始まっていることがわかっています。一方、美ヶ原山麓の旧海岸寺には10世紀末の作とされる木造十一面千手観音立像（長野県宝）が伝わっています。こうしてみると、最澄と空海が山岳に寺院を開いてから、山岳修行の寺院が松本地方にまで広まるまでにそう多くの時間を要していないことがうかがえます。

松本市の西部に目を転じると、波田の若澤寺跡（松本市特別史跡）があります。山中に開かれた若澤寺の前身とみられる元寺場跡（松本市特別史跡）からも、発掘調査で牛伏寺堂平（松本市特別史跡）と同じ9世紀後半の遺物が出土しています。元寺場の背後の山は白山と呼ばれており、白山信仰の影響があったのかもしれませんが。越前（後に加賀国を分ける）と美濃の国境に位置する白山は、富士山、立山とともに日本三霊山に数えられます。開山の歴史は古く、3,000メートル級の地方の高山が、山岳仏教の開山と時を同じくして開かれています。これに対し、信飛国境の北アルプスの主峰の開山は、近世まで待たなければなりません。

エ 乗鞍岳の開山

北アルプスの奥に鎮座する乗鞍岳（剣ヶ峰 3,026メートル）は、古代から霊山として信仰の対象とされ、大野川の梓水神社拝殿の西側に、乗鞍岳を遥拝する鳥居があります。ここに祭られる梓水神は、水分として、須々岐水神とともに従五位下に昇叙されたことが、『日本三代実録』の貞観9（867）年条に見えます。水を始め、様々な恵みをもたらす乗鞍岳は、長い間里からの崇敬を受けてきました。

『乗鞍山縁起』には、大同2（807）年に坂上田村麻呂が登頂したとか、木曾義仲が朝日大権現を勧請したという話も掲載されていますが、信ずるに足りません。また、この霊山を開いたのは円空だとも伝えられますが、これも確たる証拠はありません。

『乗鞍山縁起』は、江戸の行者梅本院永昌と大野川出身の大宝院明覚（宝徳霊神）による乗鞍岳再興に関する手記ですが、そこには明覚らの再興以前に、大樋銀山の鎮守として信仰され毎年7月2日に金堀総代たちが登山していたことが記されています。大樋銀山とは言うものの、産出する鉱物のほとんどが鉛だったので、元禄の国絵図には「鉛山」と記されています。天保の国絵図にも「鉛山」と見えますが、『信府統記』には、忠周の頃（1713～1718年）には閉山されていたことが見えます。

明覚らの乗鞍開山は文政2（1819）年に始まります。このとき、大日如来、観音菩薩、勢至菩薩の三尊が祭られていましたが、堂宇は大破していたのでいったんは山から下ろし、翌年再び安置して再興を成し遂げたとあります。この記述から、鉛の産出が盛んだった忠清・忠職の代には、大樋銀山の鎮守として信仰され毎年7月2日に金堀総代たちが登山していたことは史実とみてよいでしょう。しかし、これは山に関わる限られた人々による信仰であり、乗鞍岳が庶民に広く開かれたのは、文政3年以降ということになります。

オ 上高地の山岳信仰

本地域内では、最高峰である奥穂高岳を中心とした穂高連峰と、最北端の槍ヶ岳が信仰の対象とされています。

穂高岳の名は、正保、元禄、天保のいずれの国絵図にも見えませんが、元禄の国絵図の下図と思われる「師岡本信州筑摩郡安曇郡図」（松本市立博物館蔵）に「保高嶽」と見え、17世紀末にはその名が確認できます。『信府統記』には、「梓川出口ヨリ大野川マテノ中程西ノ方ニアル大山ナリ此嶽ハ往古ヨリ穂高大明神ノ山ト云ヒ傳ヘテ此名アリ嶮山ニシテ登ルヲ能ハズ麓ニ大明神ノ御手洗トテアラ池ト云フアリ・・・」と見えます。更に、「穂高大明神ハ火瓊々杵尊ヲ祀レルモノナリ往古當國神合地穂高岳ニ垂跡アリテ其後此所ニ鎮座セシ故在号ヲモ穂高ト稱スルモノニヤ」と、「穂高大明神ノ山」と呼ばれる理由も説明しています。

しかし、里宮である穂高神社周辺からは、穂高岳は見ることはできません。ここでいう穂高岳は、穂高連峰あるいはその前山を含む広い範囲を指していたのでしょう。江戸時代には名のある山は限られ、『信府統記』にも「梓川西ノ方ニ山嶽多シト雖トモ深山ニテ往来ナケレハ山名モ知レス」とあります。宮地直一が『穂高神社史』において、ホタカは連山に傑出するという意味であり、乗鞍、常念、槍等広く連脈の山嶺にかけた普通名辞であったのが、いつしか今日の所謂穂高の一部に固定するに至ったのかも知れない、と指摘しています。



穂高神社奥社

『穂高神社とその伝統文化』によれば、穂高神社の氏子らは、遅くとも明和7（1770）年には上高地に奥社の祠を造営するようになっていたようです。この登山ルートは、おそらくは秀麗な常念をめざして穂高を潤す烏川沿いに登り、蝶又岩小屋で1泊し、徳沢へ下りて明神へと向かうものであったのでしょう。文政7（1824）年には、飛騨新道が小倉から上高地まで開かれ、小倉から登るように変更されました。

『信府統記』は、上高地を南流する梓川の流域は「平原ニテ幅頗ル広ク」、その幅は2.5～4キロメートル余り、寒さが厳しく6月から8月までしか往来ができないため、田畑を切り開くことはできない、と記しています。山を登ってたどり着いたこの上高地の広さは驚きだったに違いなく、人々に神の世界と映ったことでしょう。そこに、水をたたえた池を神の住む明神池、その背後の峻険な峰を神が鎮まる明神岳と崇拝したのでしょう。

カ 槍ヶ岳を開いた「坊主」

上高地の北端に位置する槍ヶ岳、その下に「坊主の岩小屋」と呼ばれる小さな岩屋があります。槍ヶ岳を開いた播隆が籠った岩屋です。

播隆が初めて槍ヶ岳に登ったのは、文政9（1826）年とされています。このとき、頂上を極めたか否かについては異論がありますが、2年後の文政11（1828）年に阿弥陀、観音、文殊の3像を安置し開山をなしたというのが定説となっています。

播隆は、槍ヶ岳に先立ち、北アルプスの飛騨側笠ヶ岳を再興しています。その名のとおり、笠を伏せたような秀麗な山容から信仰の対象とされ、近世以降の記録では、天和3（1683）年に円空が開山したと伝えられます。天明2（1782）年には高山宗猷寺の南喬上人^{なんねい}が登頂したと言いますが、播隆が登頂した文政5（1822）年には登山道が荒れ、参詣の人が訪れないことを嘆き登山道を開くことを決意したと言います。文政7（1824）年に山頂に阿弥陀仏を安置し、笠ヶ岳の再興を遂げると、笠ヶ岳から仰いだ槍ヶ岳の開山へと向かいました。

播隆が笠ヶ岳を再興したのは、覚明、普寛らが御嶽を開いたのを受け、その弟子たちが各地の霊山を開いていた頃です。先述の乗鞍開山もその一例とみてよいでしょう。この時代の霊山の開山は、それまでの山における厳しい修行のためではなく、多くの人々が山にいる神仏と出会うことを目的としていました。播隆の『迦多賀嶽再興記』には「一心念仏ノ中、不思議ナル哉、阿弥陀仏雲中ヨリ出現シ玉フ事三度」とあります。御来迎と呼ばれる現象（ブロッケン現象）です。播隆は、天保5（1834）年に槍ヶ岳から笠ヶ岳に縦走したときも御来迎を拝しており、『三昧発得記』に「其丈八九尺斗リ也亦大圓光ノ内輪ハ白光色中輪ハ赤光色外輪ハ一面紫光色ナリ雲上ヲ照り耀キタマフ」と描写しています。播隆は、多くの人にこの御来迎を体験させるべく、笠ヶ岳と槍ヶ岳を開いたのです。

文政11年に播隆が槍ヶ岳を開いた後も登る人はなく、天保5年には登山道の整備



槍ヶ岳の祠（絵はがき、松本市立博物館蔵）

を行っています。このとき、山頂を平らにし、木の祠を据え、新たに銅造の釈迦如来を安置し槍ヶ岳寿命神として開闢を遂げたといわれています。この祠は、信者らによって更新され、今も山頂に鎮座しています。なお、播隆が描いた「鎗ヶ嶽」の絵図には、槍ヶ岳のほかに「穂高嶽七峯」と記された連山にも「佛安置」と記されており、播隆は穂高岳にも阿弥陀仏を安置したことがわかります。



「鎗ヶ嶽」絵図（富山市大山歴史民俗資料館提供）

(3) 近代登山発祥の地

ア ウォルター・ウェストンと上高地

(ア) ウェストンと日本

a ウェストンの生涯

ウォルター・ウェストンは宣教師として明治時代に来日し、日本に近代登山を広めた人物の1人として広く知られています。そして自らの登山を本に著していることでも知られています。上高地にもウェストンの横顔が浮かび上がったウェストン碑が設置されています。更に、毎年6月初めにウェストン祭が催されています。上高地に関係が深いとされている人物ですが、まず、彼の生涯を、雑誌『山岳』に掲載された詳細な「W. ウェストン年譜」や多くの方の著書を参考にして、追ってみましょう。

ウォルター・ウェストンは1861年12月25日に、イギリスのダービーで誕生しました。明治13（1880）年にはケンブリッジ大学クレア・カレッジに入学し、明

治16（1883）年に卒業しています。その後、神学校に入学し、卒業後は牧師となりました。牧師になってからアルプスで登山を始め、マッターホルンなどに登頂を重ねています。登山に強い関心が生じたようです。その後、明治21（1888）年に伝道のために日本を訪れます。

来日後、ほどなくして神戸に定住しました。明治23（1890）年に眼病のために宣教師を辞任しますが、日本の中央の山岳に登り始めます。そして明治27（1894）年頃にイギリスに帰国しました。

帰国後、日本アルプスについて講演を重ね、明治29（1896）年にロンドンで『Mountaineering and exploration in the Japanese Alps』（邦訳名の代表例は『日本アルプス 登山と探検』）を出版します。日本アルプスがヨーロッパに知られるきっかけの一つとなりました。

明治35（1902）年に結婚した妻とともに再来日し、横浜で牧師となるとともに、登山を重ね、明治38（1905）年に帰国しました。

明治44（1911）年に三たび来日します。横浜に住み、翌年の夏から登山を再開し、大正4（1915）年に帰国しました。

その後、イギリスにおいて日本に関する3冊の本を出版します。昭和15（1940）年に死去しました。満78歳でした。

b 日本での滞在と登山

生涯に3度にわたり来日し、滞在中は活発に登山を行っています。1回目は明治21（1888）年から明治27（1894）年にかけて来日し、明治23（1890）年から登山を始めています。登った主な山を挙げると、その年には富士山に登頂し、そして九州の祖母山に登っています。明治24（1891）年には浅間山に登った後、北アルプスに向かい槍ヶ岳を目指しましたが、登頂できませんでした。その後、御嶽山と木曾駒ヶ岳に登頂しています。明治25（1892）年には、富士山、乗鞍岳、槍ヶ岳、赤石岳、明治26（1893）年には、恵那山、富士山、立山、前穂高岳、明治27年には白馬岳、焼岳、常念岳、御嶽山に登頂しています。精力的に登山を重ねていますが、登頂した山は信州の高山が多く、その中でも特に北アルプスの山々に多く登頂しています。

2回目の来日は明治35（1902）年から明治38（1905）年にかけてであり、明治35年には夫人とともに富士山に登頂しました。次に単独で北岳に登っています。明治36（1903）年には甲斐駒ヶ岳、翌年には、金峰山、鳳凰山、北岳、間ノ岳、仙丈ヶ岳に登頂し、さらに夫人とともに富士山、戸隠山、八ヶ岳と、南アルプスの山々に多く登頂しています。

最後となる3回目の来日は、明治44（1911）年から大正4（1915）年にかけてです。明治45（1912）年には妙義山に登り、有明岳、燕岳、槍ヶ岳、奥穂高岳に登頂しています。大正2（1913）年には再び妙義山と槍ヶ岳、そして霞沢岳、奥穂高岳、焼岳、更に白馬岳に登頂しています。槍ヶ岳や奥穂高岳などには夫人も登頂するなど、夫人とともに山に向かうことも多くありました。大正3（1914）年には

立山、大天井岳、富士山に登頂し、翌年帰国しました。北アルプスの山々に多く登っています。

総じて見ると、高山が多い中部地方の山岳が登山の主な対象となり、その中でも特に北アルプスの山々が多かったことがわかります。しかも、尖峰である槍ヶ岳を「日本のマッターホルン」と呼び、とりわけ高い関心を持っていました。

c 日本に関する著作

ウェストンは日本に関する本を4冊著しています。1冊目は『Mountaineering and exploration in the Japanese Alps』であり、明治29（1896）年にロンドンで出版されました。翻訳され、『日本アルプス 登山と探検』などのタイトルで出版されています。第1回目の滞在中の登山について著されています。

2冊目は『The playground of the Far East』であり、大正7（1918）年にロンドンで出版されました。『極東の遊歩場』などのタイトルで翻訳され、出版されました。第2回目と第3回目の滞在中の登山を中心に著されています。

3冊目は『A Wayfarer in Unfamiliar Japan』であり、大正14（1925）年にロンドンで出版されました。『ウェストンの明治見聞記 知られざる日本を旅して』のタイトルで翻訳され、出版されています。ウェストンは日本各地を訪れていますが、各地の風俗習慣などが著されています。最後の著作は『Japan』であり、昭和元（1926）年にロンドンで出版されました。『宣教師ウェストンの観た日本』のタイトルで翻訳され、出版されています。滞在による体験、得た知識をまとめた書物です。

ウェストンは明治25（1892）年に英国地学協会（The Royal Geographical Society）に入会し、翌年の明治26（1893）年に英国山岳会（The Alpine Club）に入会しています。著作における登山の記述の中にも、地理的な説明だけでなく、地学的な説明もみられます。また、英国人類学研究所で講演するなど、登山ばかりでなく、風俗習慣についての高い関心を持っていました。

(イ) 上高地への来訪

ウェストンは槍ヶ岳、穂高岳、焼岳などに登る時に、上高地を訪れています。ここでは、最初の本であり、登山について詳細に書いた旅行記である『日本アルプス 登山と探検』を用いて、上高地の記述を取り上げていきます。第1回目の来日の際の記録であり、ウェストンの日本についての、日本の山岳についての最初の記録です。一番印象が深かったはずで

a 上高地への来訪と記述

最初に上高地を訪れたのは、明治24（1891）年8月です。徳本峠から入り槍ヶ岳登頂を目指しますが、不成功に終わりました。この時の、上高地の景観を評価している表現を以下に挙げます（この著作を最初に翻訳した岡村精一氏による3回目の翻訳書である『日本アルプス 登山と探検』（平凡社、1995）から引用しています）。徳本峠では、「この峠の最高点近くからの展望は、日本で一番雄大な眺望の一つで、円い形

の輪郭や緑に包まれた斜面のある普通の山の風景とは、全くその趣を異にしている。穂高山（また穂高岳とも言う）の高い姿は、眼の前にそびえ、その南の麓を、幅広い梓川の白い小石の川床が流れている。」と記述し、峠から眺める上高地の厳しい山岳風景を賞賛しています。梓川に降りて槍ヶ岳に向かいましたが、槍ヶ岳には悪天のため登頂できませんでした。その体験であり記録である文章が、歩いたルートの景観などの描写及び地理的・地学的説明とともに、続いています。

翌年に再び槍ヶ岳を目指し、登頂に成功します。徳本峠では、「谷間の反対側に穂高山の雄大な山塊がそびえ立った時には、槍ヶ岳へのほりたい愛着を変えようかと、強く心を動かされた。けれども、その願いはきっぱりと抑えた。」と、穂高岳の眺望を絶賛しています。そして、槍ヶ岳の頂上に至るまで、登山の過程を取めた文章が続いています。

明治26（1893）年には前穂高岳に登頂しています。徳本峠から入り、梓川を越えて山に向かっていきます。登山のルートの景観が記述の中心であり、ウェストンが上高地の景観などに感動した記述は特にみられません。

明治27（1894）年には焼岳に登頂しています。頂上でこんな記述をしています。「この鞍部から数百メートル上の頂上にのぼると、東側の岩の穴から蒸気や硫黄の焰が出ており火山活動の形跡を発見した。私たちがこうして苦しんでのぼって来たかいあって、北西には笠岳、真北にしかもすぐ近くには穂高山の雄大な展望が眺られた。」と記述し、頂上からの眺望を賞賛しています。

1回目の来日では上高地を4回訪れています。明治26年までの3回は行き帰りとも徳本峠を越えています。翌年には平湯から中尾峠経由で焼岳に登り、梓川沿いに下り、徳本峠を越えて帰っています。

明治35（1902）年からの再来日の時には、主に南アルプスの山々に登っています。上高地は訪れていません。

3回目の来日時には大正元（1912）年に槍ヶ岳、大正2（1913）年には槍ヶ岳、霞沢岳、奥穂高岳、焼岳に登頂しています。大正元年は行きも帰りも徳本峠を越えており、2年には徳本峠を越えて上高地に入り、平湯まで行きますが上高地に戻り、上高地からの帰りは白骨温泉経由で帰っています。

ウェストンの登山の関心の中心の一つは高山に対しての外国人初登頂にあり、それゆえに高山が連なる北アルプスを訪れ、上高地に入ることが多かったと言えるでしょう。



河童橋にて（ウェストン夫妻と嘉門次）
（大正2年、絵はがき、嘉門次小屋蔵）

b 著書全体の記述の特徴と山岳地帯の景観の評価

ウェストンのこの著書の特徴は、登山やそれに伴う旅程を通った地方の描写を淡々と記していることです。観察することが中心であり、大げさな感情表現はありません。しかし、その中で、景観のすばらしさなどに軽く言及していることもあります。例えば、序の中で中部日本の山岳地帯について、「典型的な日本の風景とはほとんど趣を異にした、雄大で野生的な景観を見出した。」と、控えめながら讃えている記述が見られます。それらの記述を通して、ウェストンが讃えたもの、評価した景観がどのようなものであったか、まとめていきます。

最初の点ですが、ウェストンが必ずと言って良いほど記しているのは、高山の頂上からのパノラマです。パノラマの景観を描写していますが、そのすばらしさを讃えています。登頂までは、多くは、地形や標高、地質や植物、岩壁や川の状態についての客観的な記述に努めています。登頂時にはその実感が述べられ、槍ヶ岳でも、赤石岳でも、立山でも、見えているパノラマの描写の中にウェストンの感動が含まれています。

2点目は山腹です。登頂に至るまでの、あるいは下山の時の記述に、視覚以外の感覚が記されています。滝や谷川の水の音であり、鳥の鳴き声、イギリスにはいない蟬の声があります。逆に静けさも描写されています。聴覚による音の景観です。また、ウェストンの好物は苺でした。野生の苺を見つけると、必ずと言って良いほど食べています。味覚です。また、苺はその香りで気付いていますし、また松の香りにもふれています。嗅覚です。更に水の冷たさも述べられています。触覚です。嗅覚と触覚は少ないですが、登山を五感で楽しんでいます。視覚的な景観だけではなく、五感を通した風景が述べられていますし、結果としてその風景の良さが記されていると言えます。

3点目は、美しいなどと記述された魅力的な場所です。本文中には、「美しい」や「絵のように美しい」などの表現が、しばしば記されています。橋場から西の深い谷、木曾谷、伊那市長谷、神坂峠の東の谷間など、深い谷が美しいと表現されています。また、森や滝、寝覚の床の奇岩、高山植物やツツジの花などの自然の美しさが挙げられています。更に、町や集落、橋などの、自然景観と調和した人工物が美しいと述べられています。木曾福島町の町であり、その町中に架かっている橋であり、信州新町から大町に至る途中にある日名集落です。

c 上高地の特徴と評価

以上の点から、もう一度上高地を捉え直してみましよう。まず、頂上からのパノラマですが、上高地には3,000メートル級の山々が並び立っています。眺望の素晴らしい場所が並んでいる状態です。2点目の五感を通した山腹の良さですが、上高地の山々に登はんする時にたどる場所全てにあてはまります。3点目のウェストンが美しいと評価している深い谷間ですが、上高地全体が当てはまると言えます。

このように、ウェストンが評価した景観ですが、上高地での直接的な記述は少ないものの、上高地に当てはまることばかりです。

(ウ) ウェストンが評価した場所と上高地の価値

上高地には、自然の面でも、文化的な面でも、様々な価値があります。日本の近代登山の生みの親の一人でもあるウェストンは、登山のためにしばしば上高地を訪れていました。そのウェストンの評価した場所と価値を、上高地において考察していきます。

まず挙げられる場所は、最初に訪れた際に記述されている徳本峠です。峠からの眺望のすばらしさ

は、2回目の訪れの時にも記述されています。眺望の良さとともに、上高地の入り口という特徴もあり、なおさらです。

次に挙げられるのは、山頂です。ウェストンは山頂からの360度に視界が広がるパノラマの眺望を絶賛しています。頂に登ったという実感でもあり、証拠でもあります。彼は槍ヶ岳を始め、前穂高岳、焼岳に登頂しています。3回目の来日の時には、更に奥穂高岳や霞沢岳に登頂しています。これらの山々の頂が絶賛という評価がなされています。

登頂のために通ったルートは、山腹である森の中ですが、確定できる場合とできない場合があります。森や苺や溪流などの良さを五感で味わっていると言えますが、特にどの場所が良い、という記述は見当たりませんでした。全体的に優れていると言えるのではないのでしょうか。

上高地は谷です。上高地という谷の景観を評価した記述ですが、徳本峠からの眺望として捉えた穂高などの山々と梓川の景観の素晴らしさの記述がそれに当たります。「美しい」と表現された緑豊かな谷の景観ではなく、荒々しい山岳景観が評価されています。

以上のように、上高地の山岳景観全体が評価されているといえます。そして、徳本峠はその景観を味わえる場所であり、山頂は360度のパノラマだけではなく、足元に広がる谷も見える優れた場所なのです。



「徳本峠ヨリ見タル穂高岳」

(大正後期～昭和初期、絵はがき、市立大町山岳博物館蔵)

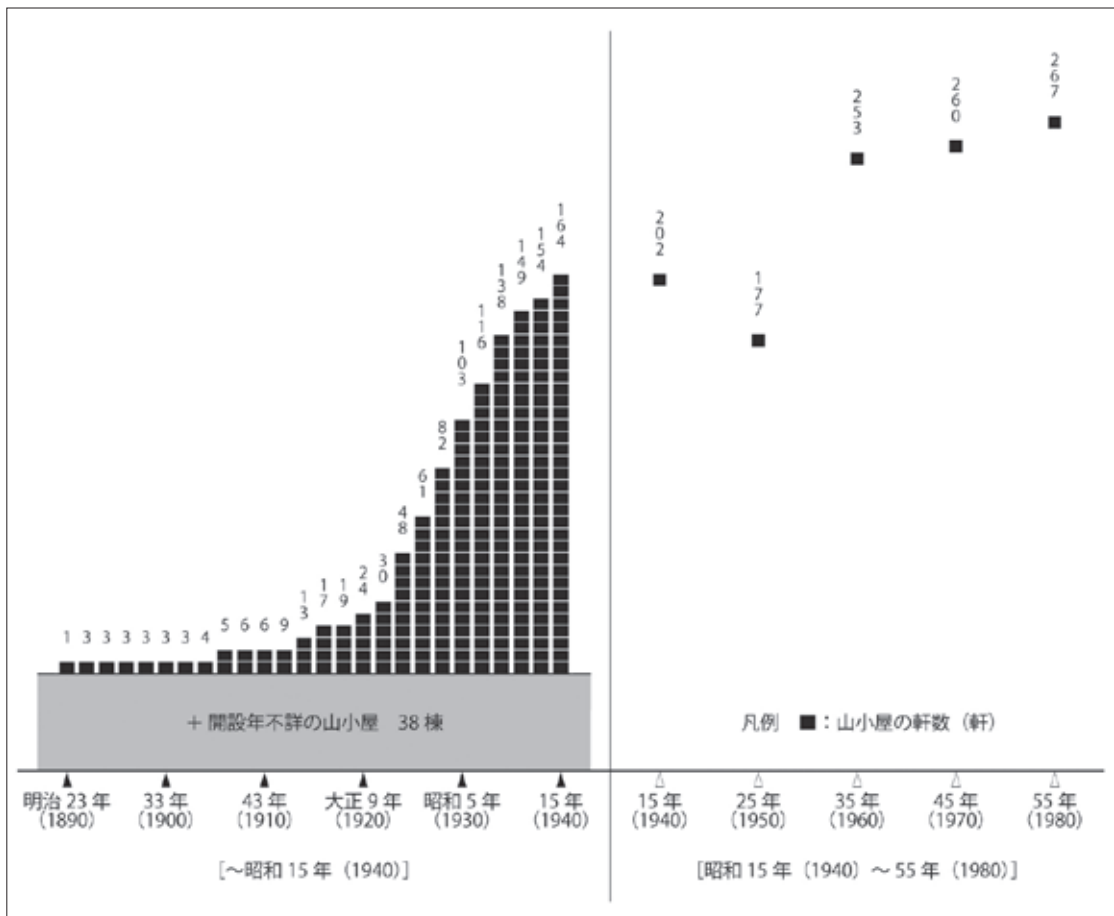
イ 山小屋の成り立ち、歴史と景観

(ア) 近代登山の伝播と山小屋の開設

明治時代、日本に山登りを純粹に楽しむ近代登山が伝播し、普及しました。その大きなきっかけとなったのは、明治27（1894）年に刊行された志賀重昂の著書『日本風景論』に所収されている「登山の気風を興作すべし」であると言われています。ここでは登山技術が解説されたとともに、それまで観察の対象となっていなかった山が詳しく紹介されました。また、先にも紹介しましたが、日本近代登山の父と称されるウォルター・ウェストンの著書『Mountaineering and exploration in the Japanese Alps』で、日本の山の美しさが世界に伝えられたことも大きなきっかけとなったでしょう。こうした山に対する新たな視点の獲得を背景として、明治38（1905）年に日本初の近代

登山のための機関である山岳会（現日本山岳会）が発足しました。

日本山岳会は、昭和5（1930）年から平成元（1989）年までの間、登山者のための登山手帳『山日記』を刊行しました。『山日記』に掲載されている情報の中でも、「山小屋一覧」は、山小屋の歴史を把握するうえで重要です。日本アルプスの山小屋について、「山小屋一覧」に記載されている情報をまとめると、明治時代後期から昭和15（1940）年までの間と昭和25（1950）年から昭和35（1960）年までの間に山小屋の軒数が増加していることがわかります。特に、明治時代後期から昭和15年までの間は著しく増加しており、この時期に山小屋の建築的な基盤が形づくられたと言え、こうした傾向は、上高地にも当てはまります。



日本アルプスの山小屋の開設過程（『山日記』『山小屋一覧』より）

(イ) 山小屋の原形

上高地へ入るためのかつての本道は、島々から徳本峠を経て上高地へと至る登山道でした。この登山道は、徳本峠からの眺望をウェストンが絶賛したことで知られています。ウェストンは、槍ヶ岳や穂高連峰を目指し、明治24（1891）年、明治25（1892）年、明治26（1893）年、大正元（1912）年と大正2（1913）年にこの登山道を歩いており、著書『Mountaineering and exploration in the Japanese Alps（日本アルプス 登山と探検）』、『The playground of the Far East（極東の遊歩道）』、『日本アルプス^{とうはん}登攀日記』などには、山行での休泊の様子が記録されています。例えば、明治24年の山行では、農商務省の出シノ沢小屋に宿泊したこと、雨にあって柚小屋に避難したこと、農商務省の徳本小屋に宿泊したことなどが記されています。また、大正元年の山行では、柚小屋の土地にできた岩魚留小屋で休憩したこと、農商務省の徳本小屋で休憩したこと、嘉門次の獵小屋を訪れたことなどが記されています。

ウェストンの山行におけるこれらの休泊場の中で、現在の山小屋と同義のものは岩魚留小屋だけです。それ以外は、どれも近代登山の普及以前から山の中に建てられていた小屋です。ウェストンがこの登山道を歩いた間に、柚小屋の土地に岩魚留小屋ができたように、後に、嘉門次の獵小屋の土地には嘉門次小屋ができ、牛番小屋の土地には明神館ができました。他方、徳本峠小屋のように、新たな土地にも山小屋ができました。その際には、近代登山の普及以前から山を生業の場とした人々の土地勘に基づいて、条件のよい土地が開拓されました。山の厳しい自然の中では、建物を建てることのできる土地が限られ、災害に遭う危険性も高いため、近代登山の普及以前から山の中に建てられていた小屋の土地に山小屋が開設されたことや、近代登山の普及以前から山を生業の場とした人々の土地勘に基づいて山小屋の土地が開拓されたことは、きわめて合理的な過程であったと言えます。

同様の過程は、山小屋の建物にもみることができます。歴史的な建物が残る岩魚留小屋、徳本峠小屋、嘉門次小屋の建設当初の姿は、どれも、梁間2間×桁行3間ほどの広さの、屋内に炉が設けられた1間の建物でした。こうした姿の建物は、山の厳しい自然の中で人が体を休めることのできる、多機能で最小限の空間であったと言えます。柚小屋や獵小屋など、近代登山の普及以前から山の中に建てられていた小屋の記録にもこうした姿の建物がみられることから、近代登山の普及以前から山の中で育まれてきた建築の文化をもとに山小屋が建てられた、という山小屋の建設過程に関する一つの具体像が復原されます。

(ウ) 山小屋の建設と維持

山小屋の建設は、近代登山の普及を目的とした総合的な構想を伴って、登山道の開削などと一体的に進められました。その結果、上高地には、中房温泉と上高地温泉という二つの温泉を主な登山基地として、槍ヶ岳や穂高連峰などの名立たる山々を周遊することのできる登山道が整備され、その要衝には山小屋が建設されました。また、大正4（1915）年に中房温泉に最寄りの有明駅（信濃鉄道：現JR大糸線）が、大正11（1922）年に上高地温泉に最寄りの島々駅（筑摩鉄道：現松本電鉄）が開設さ

れると、上高地の登山基地や登山道は、都市と連結されることとなりました。これによって、登山者の数がより一層増加したことは想像に難くありません。

登山者の数が増加すると、山小屋の数も増え、規模も拡大されました。上高地の山小屋の場合、建物は木造で、その建設と規模の拡大は、概ね昭和40（1965）年頃までに行われました。現在のように、山小屋の木材



徳本峠小屋

がヘリコプターによって運ばれるようになったのも昭和40年頃ですから、それ以前は人力によって木材が運ばれたこととなります。これを担ったのが、歩荷^{ぼっか}とよばれる物資運搬を専門とした職人です。力量のある歩荷は、体重の倍ほどの物資を背負ったといい、木材を運搬する際には、背負いやすいように長さの基準を10尺ほどとし、長いものでも15尺ほどまでとしたと言います。こうした証言が示すように、上高地の山小屋には、比較的短い木材を合理的に組み上げた建物の事例を確認することができます。

また、山小屋が建設された後には、建物の維持が問題となります。とりわけ、冬期の雪氷被害にどのように備えるかという点は、どの山小屋にとっても大きな問題となります。こうした問題に対し、雪氷被害を最小限に抑えるために、地形に擬態して建物の形態を計画した事例や、冬囲いとよばれる仮設の囲いや柱を設置し、毎年の雪氷被害の状況を踏まえて継続的かつ発展的に改良してきた事例を確認することができます。

このように建設、維持されてきた山小屋は、山の厳しい自然の中に建つ建築の絶え間ない成長の軌跡を伝えているとともに、周囲の圧倒的な自然と一体となって、山と人の相互作用を伝える文化的な景観を形成しています。昭和6（1931）年に国立公園



周辺風景と調和する山小屋（ヒュッテ西岳）

法が施行された当時、自然の風景地の保護と利用という相反する方向性について議論が起きました。この議論に対する一つの解答として、自然の風景地に調和する建築意匠が山小屋を事例に模索された歴史があり、この歴史の中に上高地の山小屋も数多く登場します。上高地の文化的な景観の美しさは、こうした模索の蓄積の上に現われたものです。

ウ 山岳ガイドの系譜

明治・大正時代、上高地から槍・穂高連峰などを目指す近代登山者たちの山岳ガイド役を務め、「上高地の主」として慕われたのが安曇村島々（現松本市安曇）の上條嘉門次（弘化4（1847）年～大正6（1917）年）です。山案内人としての嘉門次は「冷静沈着」、「剛胆親切」、「頑固一徹」、などと一様に評され、登山者からの信用は厚いものでした。山案内人として高い評価を得た嘉門次ですが、本来の姿は、山の幸を得て暮らす



ウェストン(右端)を案内する上條嘉門次(左端)
中央は根本清蔵、フランシス・エミリー・ウェストン撮影
(大正2年、坊主の岩小屋前にて、上條輝夫氏提供)

猟師・釣師でした。嘉門次は上高地の明神池畔に建てた小屋を拠点にして、夏は梓川や明神池でイワナを釣り、秋から冬にかけては鉄砲を担いで犬たちを従え周辺の山々へ入ってクマやカモシカを撃って過ごしました。釣りと猟の腕は抜群であったといい、上高地で釣竿を立てた嘉門次の姿と猟に関する様々な逸話は上高地を訪れた人々の多くが記すところでした。

こうして1年のほとんどを上高地で暮らす生活を重ね、周辺の山々の地形・地理に精通していたため、登山者の山岳ガイド役が務まったのです。嘉門次が登山者を山に案内した回数は主に晩年の10年間を中心に20回程度であったにもかかわらず、山案内人としての嘉門次像を強く印象付けたのがイギリス人宣教師ウォルター・ウェストンの著書です。

嘉門次の長男である上條嘉代吉(明治4(1871)年~大正8(1919)年)や、嘉代吉の三男で嘉門次の孫にあたる上條孫人(明治43(1910)年~昭和51(1976)年)、更に、猟師として嘉門次に師事した細江村数河(現岐阜県飛騨市)出身の大井庄吉(明治12(1879)年~昭和19(1944)年)や上宝村中尾(現岐阜県高山市奥飛騨温泉郷中尾)出身の内野常次郎(明治17(1884)年~昭和24(1949)年)も山案内を行いました。また、嘉門次と同時代を生き、上高地周辺で近代登山者たちの山岳ガイド役を務めた人物としてほかに名が通るところでは、自身の名が冠された登山道「喜作新道」で知られる小林喜作(明治8(1875)年~大正12(1923)年)が挙げられます。西穂高村牧(現安曇野市穂高)に生まれた喜作も登山者に請われれば猟や山仕事の合間に山を案内したりもしましたが、嘉門次同様、北アルプスを生活の場とし、上高地周辺山域の地理・地形に通じた猟師でした。

大正時代に入るまでは十分な地形図や山の案内書はなく、北アルプスにおける登山といえば夏山中心で、道筋を探しながらの探検的な登山が主でした。そのため、当時の登山では山を案内する者の同行が不可欠でした。この頃、登山者を案内したり登山の助言をしたりしたのは、山の地理に精通し、山中での暮らしに熟練した地元の猟師・釣師や樵などの「山人」と呼ばれる山の幸を得て生活の糧としていた人たちが中心でした。嘉門次や喜作ら山人が持ち合わせていた狩猟などの技術は、彼らが生まれ育った山の集落に何世代にもわたって綿々と継承された山の知恵によるところが大きかったと言えます。そうした山の知恵は彼らから次世代へも引き継がれ、後に組織的な体制を整えていった近代登山における山案内人たちにも大きな影響を与えたと考えられます。こうした流れには山岳ガイドの系譜と呼べる一連のつながりが現れてきます。実際に、初期の山案内人の中には、山人と共に山を歩くことで初めて山を覚えたという人々



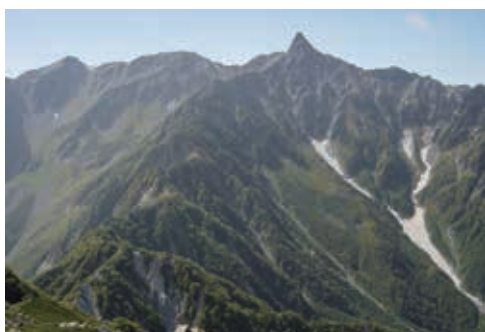
登山者を案内する小林喜作(左)
(小林貢氏提供)

が多くいました。

国内の近代登山黎明期において、近代登山者と山岳ガイド役を務めた山人とが会うことになった場所の一つが上高地でした。そして、両者の邂逅^{かいこう}以降、上高地を起点として槍・穂高連峰周辺山域での探検的登山や縦走登山が次々に行われ、近代登山はその幕開けから隆盛へと発展を遂げていきました。

エ 登山道の開発

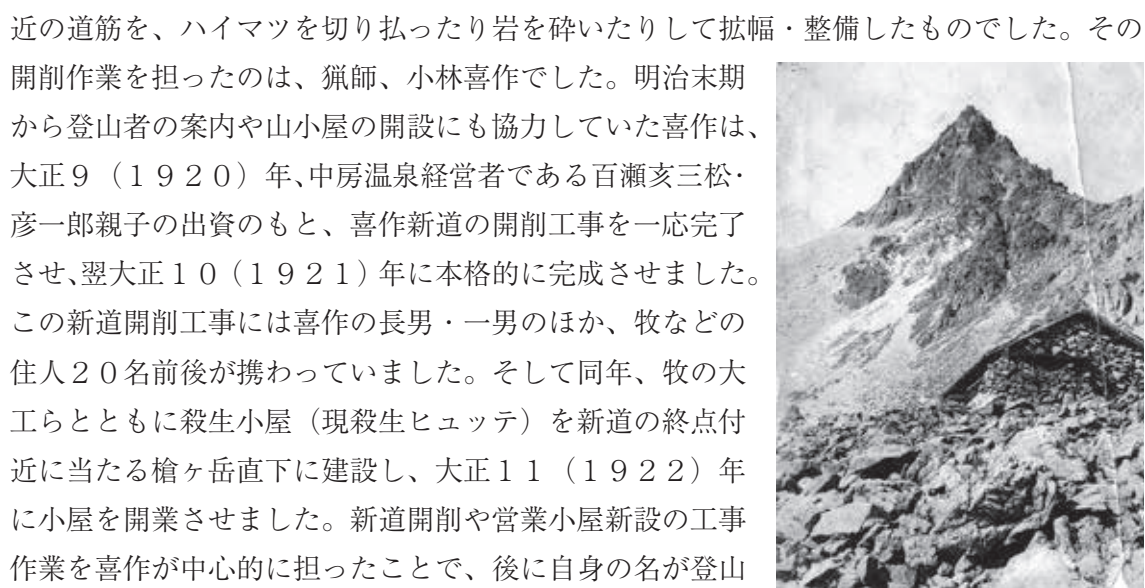
明治末・大正期、北アルプスでは探検的登山と縦走登山が行われるようになりました。この頃、国内の近代登山を取り巻く環境も整い始めました。鉄道の整備、地形図の発行、山小屋の開業、山案内人組合の発足、学校集団登山の普及、学生山岳部や社会人山岳会といった各種山岳団体の設立などがあいまって、いわゆる大正登山ブームを迎えました。大正時代、登山愛好者の増加につれて山小屋の開業も進められたことで、登山者の数は更に増えていきました。北アルプス稜線付近の人気ルート上には大正5（1916）年前後から、登山者の増加を反映して次々と近代登山者向けの営業小屋が建てられるようになりました。こうした山小屋によって登山がより快適になるとともに、安全面でも大きな役割を果たすようになりました。



喜作新道がある槍ヶ岳東鎌尾根
(ヒュッテ西岳付近より)

この時代、山小屋の建設とともに登山道の整備も進みました。上高地周辺の山域では、今日「北アルプス表銀座」などと呼ばれる縦走路の一部、大天井岳から西岳を経て東鎌尾根から槍ヶ岳へ至るルート「喜作新道」が大正時代に拓かれました。この新道の完成によって燕岳から槍ヶ岳までの縦走コースの距離が短縮され、登山行程が少なくなり、登山者の大きな助けとなりました。この新道は、もとあった猟師たちが通る獣道程度の稜線付近の道筋を、ハイマツを切り払ったり岩を砕いたりして拡幅・整備したものでした。その開削作業を担ったのは、猟師、小林喜作でした。明治末期から登山者の案内や山小屋の開業にも協力していた喜作は、大正9（1920）年、中房温泉経営者である百瀬亥三松・彦一郎親子の出資のもと、喜作新道の開削工事を一応完了させ、翌大正10（1921）年に本格的に完成させました。この新道開削工事には喜作の長男・一男のほか、牧などの住人20名前後が携わっていました。そして同年、牧の大工らとともに殺生小屋（現殺生ヒュッテ）を新道の終点付近に当たる槍ヶ岳直下に建設し、大正11（1922）年に小屋を開業させました。新道開削や営業小屋新設の工事作業を喜作が中心的に担ったことで、後に自身の名が登山道に冠されることになりましたが、一連の開発事業は、出資者である中房温泉の百瀬家による北アルプス南部の山岳

この時代、山小屋の建設とともに登山道の整備も進みました。上高地周辺の山域では、今日「北アルプス表銀座」などと呼ばれる縦走路の一部、大天井岳から西岳を経て東鎌尾根から槍ヶ岳へ至るルート「喜作新道」が大正時代に拓かれました。この新道の完成によって燕岳から槍ヶ岳までの縦走コースの距離が短縮され、登山行程が少なくなり、登山者の大きな助けとなりました。この新道は、もとあった猟師たちが通る獣道程度の稜線付



開設当時の殺生小屋
(大正末期頃、小林貢氏提供)

観光化構想の一部であったことが近年の調査研究から明らかにされています。

その後も、上高地周辺の山域には旧来の登山道とは別に新しい登山道が拓かれるようになっていきました。例えば、徳本峠から大滝山へ至る登山道「中村新道」は、昭和16（1941）年頃に松本市出身の中村喜代三郎によって拓かれた山小屋管理用ルートがもとになっています。また、上宝村神坂蒲田温泉（現岐阜県高山市奥飛騨温泉郷神坂）出身の今田重太郎が昭和26（1951）年に完成させた「重太郎新道」は、岳沢小屋から前穂高岳までの直登ルートです。

明治時代以降の国内の近代登山において、新しく整備されたこうした登山道は、猟師・釣師や樵、修験者や登拝者などが奥山へ通った狩猟・漁労・採集や信仰を目的とした近世以前からの徒歩道とは異なる道でした。それらは近代登山者が山頂へ登るために拓かれた登頂ルートや縦走ルートであったり、近代登山者向けの営業小屋への短縮ルートとして拓かれた道や、荷上げ・荷継ぎ用のルートとして拓かれた道であったりしました。こうした登山道の開発は、現在の上高地周辺山域における登山ルートのバリエーションの豊富さにつながり、槍・穂高連峰周辺の山々を登山愛好者に人気のエリアへと押し上げたと同時に、登山の安全と利便さに大いに寄与し、国内の近代登山をいっそう振興させる一つの要因となりました。

(4) 文人墨客の来訪

近代登山の幕開けとともに登山基地となった上高地は、焼岳の噴火による大正池の出現等により、風光明媚な観光地としても脚光を浴びるようになりました。このような中、大正期に入ると上高地を訪れる文人墨客が目立つようになり、上高地は芸術作品の舞台として、近現代文学や近現代絵画等の芸術面でも大きな役割を果たすようになりました。以下、上高地がどのように書かれ、詠われ、描かれてきたか、上高地を訪れた主な文人墨客とその作品を紹介します。

ア 小説

(ア) 芥川龍之介と『河童』

龍之介が上高地を訪れたのは、明治42（1909）年8月です。当時旧制府立第三中（現両国高校）の生徒であった龍之介は、小島烏水の『鎗ヶ嶽探険記』等の書籍に刺激されて、夏休みに友人と槍ヶ岳に登っています。この時の上高地の景観は強く印象に残り、後年、夏の旅行地の感想を求められたアンケート（雑誌「新潮」大正7年8月号）で、「信濃の上河内が今まで夏行つた土地では一番気に入つてゐます。」と答えています。

昭和2（1927）年に発表された芥川龍之介の小説『河童』は、上高地が舞台となっており、精神病院の入院患者が河童の国へ行った経験を語るという内容です。主人公の「僕」は、穂高を目指して梓川を遡るうちに河童に出会います。捕まえようと熊笹の中を夢中で追いかけ、背中にさわったと思った瞬間、深い闇の中へ真逆さまに転げ落ちてしまいます。気がつくとそこは河童の国でした。この転落場面には、「僕は「あつ」と思ふ拍子にあの上高地の温泉宿の側に「河童橋」と云ふ橋があるのを思ひ出しました。」（芥川龍之介全集第14巻）という記述があり、かつて河童橋（当時は吊り橋で

はなく^{はね}芻橋)を渡った体験をもとに、梓川上流に河童の国を設定していることがわかります。転落後は、話の場面が地底の河童の国へと移り、「僕」の滞在の経験が語られますが、河童の世界を使って、近代社会、芸術、思想などを批判する展開となっており、諷刺文学の傑作とされています。

(イ) ^{いのうえ やすし}井上靖と『氷壁』

井上靖の小説『氷壁』は、昭和30(1955)年1月2日、前穂高岳で起きた「ナイロン・ザイル事件」をヒントに書かれた作品です。主人公魚津は、親友の小坂と冬の前穂高岳東壁に挑戦します。しかし、切れないといわれていた2人を結んだナイロン・ザイルが切れ、小坂は墜落死します。魚津は、切断について様々な臆測が飛ぶ中で、小坂の死の真相をつきとめようとします。そんな中、魚津は、小坂の恋人で人妻の美那子に惹かれていきますが、小坂の妹かおるのプロポーズを受けて結婚を決意します。そして、美那子の幻影を払い捨てるため滝谷の難壁を登り、かおるが待つ徳沢小屋(現徳澤園)に向かおうとしますが、落石で命を失います。このように『氷壁』は、社会的な話題性をもったドラマチックな長編小説で、文芸性も高く、井上靖はこの小説で、第15回の芸術院賞を受賞しています。



徳澤園を訪れた井上靖(中央)
(昭和53年、徳澤園提供)

昭和31(1956)年9月、井上靖は友人に誘われて涸沢小屋へ月見に出かけ、これがきっかけで朝日新聞に『氷壁』を連載することになります。執筆が始まると何回か上高地へ足を運び、重要な舞台となった徳沢小屋を訪れ、穂高に登っており、この体験が小説にあふれる臨場感につながっていると言われています。小説の中には、「大正池の水は少し^か涸れた感じで、水中に何十本かの枯木を立てたまま、^{こじわ}小皺ひとつ見せないで静まり返っていた。」(井上靖全集第11巻)などと上高地を描写しています。

(ウ) ^{きたもりお}北杜夫と上高地

昭和20(1945)年に松本高等学校に入学した北杜夫は、この年の7月に西穂高岳に登っていますが、このとき足を踏み入れた上高地の印象を、小説『母の影』に次のように記しています。「一つの高い崖を右方にまわると、だしぬけに眼前が展けた。そして、写真でだけ見知っている茶褐色の岩だらけの焼岳が現われ、その横手に残雪も^{まだ}斑らの穂高連峰が予想を越えて美々しく続いているのが目に映ってきた。そのときの感動を何と現わしたらよいものだろう。微妙に残雪と岩場が交錯するその山容は、およそこの世ならぬものとして私の目に映じた。日本の風景でないように思えた。」また、初期の代表作『幽霊』には、上高



北杜夫 西穂高岳にて
(昭和20年、斎藤喜美子氏蔵)

地での体験が随所に詩情豊かに表現されています。

なお、エッセイではありますが、『どくとるマンボウ昆虫記』にも、上高地の美しい景色とともに植物や蝶の様子が登場します。

上高地を愛した北杜夫は、生涯にわたり上高地を訪れています。亡くなる前年にも家族で訪れ、エッセイ集『マンボウ最後の家族旅行』には「上高地は私のもっとも好きな土地だ」と記しています。青春時代の記録『どくとるマンボウ青春記』には、松本高等学校時代に神経衰弱になったとき、穂高を見たなら、鬱々たる心情も回復するであろう、と徳本峠を越えて徳沢小屋に下る場面が登場し、上高地の大自然が、ベストセラー作家北杜夫の支えになっていたことがうかがわれます。

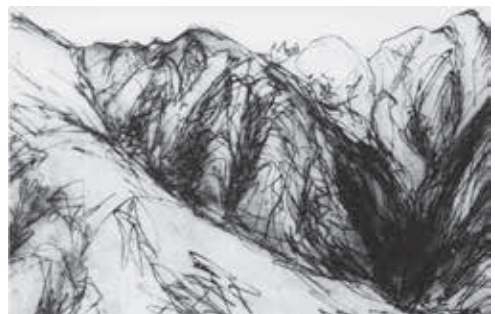
(I) 上高地が登場する小説

山岳小説の巨匠といわれる新田次郎は、江戸時代に槍ヶ岳に登った播隆上人の生き様を描いた『槍ヶ岳開山』を始め、『栄光の岩壁』、『孤高の人』、『怪獣』など、上高地が登場する多くの作品を残しています。そのほか佐藤春夫の『小説智恵子抄』、辻邦生の『雪崩のくる日』、山本茂実の『喜作新道』など、上高地が登場する小説は多数刊行されています。

イ 詩歌

(ア) 高村光太郎と智恵子

大正2（1913）年の夏、高村光太郎は、展覧会に出品する絵画作品を制作するため上高地に滞在しましたが、そこに長沼智恵子がやってきます。光太郎は「智恵子の半生」に次のように書いています。「九月に入ってから彼女が画の道具を持って私を訪ねて来た。その知らせをうけた日、私は徳本峠を越えて岩魚止まで彼女を迎へに行つた。彼女は案内者に荷物を任せて身軽に登つて来た。山の人もその健脚に驚いてゐた。私は又徳本峠を一緒に越えて彼女を清水屋に案内した。上高地の風光に接した彼女の喜は実に大きかつた。（後略）」この頃、2人は互いに特別な存在として意識し合い、共に芸術の道を歩もうとしていました。そして、上高地で写生に歩き回らる中で愛を確かめ合い、婚約しています。この年作った詩に「山」があります。「山の重さが私を攻め困んだ 私は大地のそそり立つ力をこころに握りしめて 山に向つた」で始まる全文29行の作品は、上高地で山と対峙することで生まれました。また、その後も、智恵子と過ごした上高地での出来事を思い出しながら、「ああ、あなたがそんなにおびえるのは 今のあれを見たのですね。」で始まる詩「狂奔する牛」（大正14年）や「水墨の横ものを描きをへて その乾くのを待ちながら立つてみて居る 上高地から見た前穂高の岩の幔幕」で始まる詩「或る日の記」（昭和13年）など、上高地を詠った作品を残しています。



高村光太郎が描いた上高地のスケッチ
(窪田空穂記念館提供)

(イ) 尾崎喜八とウェストン祭

詩人尾崎喜八は、毎年のようにウェストン祭に参加し、上高地の自然を楽しみました。小鳥が好きだった尾崎喜八は、その歌声に聞き惚れ、「山側の暗い林からは、早くも黄ビタキ、ルリビタキ、エゾムシクイなどの小鳥の囀りが、或いは水の滴のように、或いは小さい鈴を振るように聴こえて来た。あたりに響くその結晶のような澄んだ声にも、すべて色や匂いがあるように思われた。」(『尾崎喜八詩文集8』「いたるところの歌」)のように記しています。当日は、祭りの始まる前に即席の詩を作り、ウェストンの碑の前で自ら朗読するのが通例でした。ウェストン生誕100年に当たる第15回の祭りには、「私たち山を愛するともがら、今年もまたこの神河内の谷に入って来て、今日、六月四日、午前十時、あなたの碑の前に集まっています。(後略)」と、ウェストンに呼びかける形で朗読しています。また、詩帖には「玉のような時間(上高地にて)」と題する次のような詩が残されています。「原始林の中のこの片隅が そのまま一幅の小さい画であり、一篇の歌であることを認めよう。(後略)」(『尾崎喜八詩文集3』)。なお、昭和37(1962)年に上高地に建てられた山岳遭難者慰霊碑「山に祈る塔」には、尾崎喜八の「流転の世界 必滅の人生に 成敗はともあれ 人が傾けて 悔いることなき その純粋な 愛と意欲の美しさ」という命を落とした登山者への愛の言葉が刻まれています。

(ウ) 窪田空穂と日本アルプス

東筑摩郡和田村(現松本市和田)出身の歌人窪田空穂は、大正2(1913)年に島々から徳本峠を越えて上高地に入り、槍ヶ岳への登高を試み、焼岳に登りました。宿の上高地温泉場(清水屋)では、ウェストン、高村光太郎らと泊まりあわせました。このとき光太郎らと談笑していると、「もしもし」という訛りのある声に驚かされます。これがウェストンとの出会いでした。空穂は随筆『日本アルプスへ』の中で、「それは隣室にあるウェストンといふ外国宣教師の声であることが分つた。その人は、夫人が病気をして寝てゐるが、我々の話し声で眠ることができない、遠慮をしてくれ、と要求するのであつた。」と記しています。その後、上高地を去る日には、岩魚留で光太郎を追ってきた長沼智恵子に会っています。2度目に上高地を訪れたのは大正11(1922)年で、烏帽子岳から裏銀座を縦走して槍ヶ岳の頂上を極め、上高地へ下っています。この2回にわたる山行は、160首を超える短歌となり、歌集『濁れる川』、『鳥声集』、『鏡葉』に収められ、近代短歌の山岳詠における秀でた作品として高く評価されています。以下、『濁れる川』に載る3首です。

放牧の駒ども人のわれら見てなつかしげにも近寄り来るも
ものすべて荒き谷かも上高地ものすべての清らなるかな
この池の岩魚とりてはくらすてふ嘉門次の爺や神さびぬらし

(『窪田空穂全歌集』より)



茨木猪之吉が描いた似顔絵

上段：左から茨木猪之吉、窪田空穂、谷谷三郎

下段：左から真山孝治、高村光太郎

(大正2年、『日本アルプスへ』窪田空穂著より)

(I) 上高地を詠んだ歌人

以下、上高地を訪れた我が国を代表する歌人とその作品2首ずつを紹介します。

a 島木赤彦しまきあかひこ

諏訪郡上諏訪村（現諏訪市）出身で、「アララギ」発展の基礎をつくった島木赤彦は、東筑摩郡広丘尋常高等小学校の校長として赴任した明治42（1909）年の夏、職員と上高地を訪れました。この時の作品「上高地温泉」は、赤彦の第一歌集『馬鈴薯の花』の巻頭を飾っています。

森深く鳥鳴きやみてたそがるる木の間の水のほの明りかも
久方の朝あけの底に白雲の青嶺あをねの眠り未だこもれり

（『島木赤彦全歌集』より）

b 若山牧水わかやまぼくすい

旅を愛し、全国各地を旅して多くの自然詠を残した若山牧水は、大正10（1921）年10月15日、滞在した白骨温泉から上高地に入りました。歌集『山桜の歌』には、「上高地附近のながめ優れたるは全く思ひのほかなりき、山を仰ぎ空を仰ぎ森を望み溪を眺め涙端なく下る。」という詞書がある「上高地付近」という作品を残しています。

山七重わけ登り来て斯くばかりゆたけき川を見むとおもひきや（梓川）
たち向ふ穂高が嶽に夕日さし湧きのぼる雲はいゆきかへらふ

（『若山牧水全歌集』より）

c 太田水穂おおたみずほ

東筑摩郡原新田村（現塩尻市広丘原新田）出身で、歌誌「潮音」を創刊主宰した太田水穂は、大正13（1924）年6月2日浅間温泉で幸田露伴と会い、翌日、馬を借りて徳本峠を越えて上高地を訪れました。この時に詠んだ「上高地」という作品は、歌集『冬菜』に収められています。

のぼりきてまなこに向ふ穂高嶽こゑなきものの寂しさを見し
この谷をかきうづめたる雲霧の裾べに冷えて水の素青すあをさ（大正池）

（『太田水穂全歌集』より）

d 釈迢空しゃくちょうくう（本名 折口信夫おりくちしのぶ）

歌人であり民俗学者でもある釈迢空は、大正15（1926）年10月、徳本峠を越えて上高地に入りました。このときの作品は「上河内」と題して、歌集『春のことぶれ』に収められています。なお、上高地への途次に詠んだ「をとめ子の心 さびしも。清き瀬に 身はながれつゝ、人恋ひにけむ」が島々谷に歌碑となっています。これは、飛騨から落ちのびた松倉城主三木秀綱の奥方が、この地で杣人に殺



釈迢空歌碑

されたという悲話によるものです。

山中に わが見る夢の あとなさよ。覚めて思ふも、かそけかりけり
山晴れて 寒さ するとくなりにけり。膝をたゝけば、身にしみにけり

(『折口信夫全集24』より)

e 齋藤茂吉

「アララギ」の発展に大きく貢献し、昭和26(1951)年に文化勲章を受章した齋藤茂吉は、昭和8(1933)年10月上高地に遊びました。この時の作は歌集『白桃』に、「高山国吟行」七部作の「四、上高地」として収められています。

しづまりし色を保ちて冬に入る穂高の山をけふ見つるかも
この谷をうづめて生ひし山菅はひといろにして枯れ伏しにけり

(『齋藤茂吉全歌集』より)

f 与謝野晶子

「明星」の中心歌人として活躍した与謝野晶子は、昭和11(1936)年8月上高地を訪れました。この時の作品は、遺稿歌集『白桜集』に「中部山岳抄」として収められています。下記の2首目には、亡き夫鉄幹を慕う心情があふれています。

穂高嶺と白樺ばやし百鳥がそのあひだにて朝をさへづる
白樺のはやしの中はなほ君と遊べる旅にあるここちする

(『定本 與謝野晶子全集第7巻』より)

(オ) 上高地を詠んだ俳人

以下、上高地を訪れた我が国を代表する俳人とその作品2句ずつを紹介します。

a 高浜虚子

俳句の革新運動を進めた正岡子規に師事した高浜虚子は、子規派の俳誌「ホトトギス」を継承し、近代俳句の中心的存在として活躍しました。昭和6(1931)年に上高地を訪れ、焼岳を詠んでいます。

飛驒の生れ名はとうといふほととぎす
火の山の裾に夏帽振る別れ

(『定本 高濱虚子全集』句集「五百句」より)

b 水原秋桜子

「ホトトギス」に新風を起こし、俳誌「馬酔木」を主宰した水原秋桜子は、山岳俳句にも新しい世界をひらきました。昭和5(1930)年刊行の句集『葛飾』に「上高地」を発表し、以後も度々上高地を訪れ、その自然を詠んでいます。

白樺を幽かに霧のゆく音か (『水原秋桜子全集第1巻』句集「新樹」より)
立ちめぐり白樺声す秋の雨 (『水原秋桜子全集第4巻』句集「玄魚」より)

c ^{かとうしゅうそん} 加藤楸邨

俳誌「寒雷」を主宰した加藤楸邨は、人間の生きる姿を探求し、内面の動きを俳句に表現して、「人間探求派」の俳人と呼ばれました。上高地を訪れたときの作品4句が、昭和6（1931）年に刊行された句集「寒雷」に収められています。

キャンプの火あがれる空の穂高岳
峡の温泉は白樺を焚く火をあげぬ

（『加藤楸邨句集』 句集「寒雷」より）

d ^{いいただこつ} 飯田蛇笏

山梨県出身で、「ホトトギス」で活躍した飯田蛇笏は、東京で学びましたが帰郷し、山梨の自然の中で数々の秀句を生み出し、俳誌「雲母」を主宰しました。蛇笏の功績をたたえ「蛇笏賞」が創設されました。昭和14（1939）年に上高地を訪れました。

^{こなし} 山梨熟れ穂高雪溪眉の上

こゝにして我鬼を偲べば秋螢（河童橋の前書きあり、「我鬼」は芥川龍之介の俳名）

（『飯田蛇笏集成第2巻』 句集「山響集」より）

(5) 上高地を描いた画家と作品

上高地は日本の山岳景観を代表する名勝地であり、今も昔も、その美しい風景を描きたいと多くの画家たちが訪れます。しかし交通事情の不便だった時代に、画材を携えて上高地や日本アルプスに登って制作するのはかなりの困難が伴いました。

絵を描くために画家が山に分け入ったのは、明治29（1896）年夏に丸山晚霞と吉田博が、晚霞の生家である長野県小県郡祢津村（現東御市祢津）から松本を経て安房峠を越え、飛騨高山まで写生旅行をしたのが最初と言われています。この時2人は島々から梓川の溪谷沿いに入り、白骨温泉を経由して平湯に出たというから、上高地は訪れていません。

その後徐々に画家が山に入るようになりますが、これは水彩画の普及と関連しています。明治34（1901）年に大下藤次郎が水彩画の入門書『水彩画の栞』を出版するとベストセラーになり、明治38（1905）年にやはり大下が「みづゑ」を創刊します。こうして明治末期から大正期にかけて水彩画が流行しますが、水彩の画材は装備の手軽さから山行に携行されるようになり、画家の山行を後押ししました。前述の丸山晚霞と吉田博もまた、当時から盛んに水彩画を描いていた画家です。

石井鶴三は、明治42（1909）年に蓮華岳、針ノ木岳、爺ヶ岳、鹿島槍を縦走していますが、この時吉田博と出会っています。吉田は12号と8号のキャンバスを携行していたというから油彩の画材を持ち込んでいます。鶴三は翌年には烏帽子岳から水晶岳、三俣蓮華岳、双六岳を経て槍ヶ岳まで縦走しましたが、この山行は山本鼎が一緒でした。

彫刻家の高村光太郎が大正2（1913）年8月から10月にかけて上高地に滞在し、智恵子も訪れたことは、よく知られています。

当時の全国規模の公募展に出品された上高地関連の作品についてみてみましょう。

明治40（1907）年に開催された第1回文展（文部省美術展覧会、日展の前身）に、大下藤次郎が「穂高山の麓」を出品しています。大下は同年7月に上高地に一週間近く滞在

して制作したことを紀行文に書いているので、この時の一作であると思われます。

以下、作品名から上高地に関連したと考えられる作品を挙げると、中川八郎「日本アルプス」(大正3年、第8回文展)、「上高地の夏」(大正5年、第10回年文展)、片多徳郎「上高地雲景」(大正8年、第6回日本美術院展)、石井鶴三「穂高岳」、「山上の池」(大正14年、第3回春陽会展)、小林和作「上高地風景」(昭和2年、第5回春陽会展)、足立源一郎「焼岳」、



大下藤次郎「穂高山の麓」(東京国立近代美術館蔵)

「穂高岳残雪」、「上高地初秋」、「小梨平初夏」、「上高地初夏」、「五月雨る、穂高」(昭和5年、第8回春陽会展)、山口進「鎗ヶ岳連峰」、「上高地大正池」(木版画、昭和6年、第9回春陽会展)、中沢弘光「上高地より焼岳を見る」(昭和8年、第20回光風会展)、児島善三郎「曇る上高地(徳本峠)」(昭和8年、第3回独立美術展)などが確認できます。

地元では松本市梓川出身の宮坂勝が、フランスから帰国した直後の昭和2(1927)年に上高地を訪れて制作しています。その後も宮坂は、第4回1930年協会展(昭和4年)に「キャンプ」、「上高地林道」、第5回同展(昭和5年)に「槍ヶ岳遠望」、第9回国画会展(昭和9年)に「上高地風景」を出品しています。

1930年代から1940年代には、多くの画家がアルプスを訪れるようになります。戦時中、表現の自由が奪われ、軍部による美術統制を受けるようになった画家たちは、画室を出て山に向かいました。更に敗戦後は、戦争画を描いた画家たちが戦争責任を逃れるように山に入り山岳画を描いています。

昭和11(1936)年には日本山岳画会が創立されました。創立会員は、足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、小菅徳二、丸山晚霞、染木煦、武井真澄(真徴)、吉田博、末光績、内野猛の12名であり、小島烏水と藤木九三が顧問となりました。

現在の諏訪市に生まれた武井真澄(真徴)は、松本中学(現松本深志高校)に学び、東京美術学校(現東京芸術大学)鑄金科を卒業しました。その後、松本中学の図画教師となり、明治33(1900)年から15年間同校に勤めています。日本山岳会会員でもあり、同会



安井曾太郎「秋の霞沢岳」
(長野県信濃美術館蔵)

の初期の会章は武井の図案によります。

茨木猪之吉は昭和17(1942)年12月雪の上高地に赴き、戦時下の金属供出により破壊隠滅の危機にあったウェストンレリーフの取り外しと保管に携わりますが、昭和19(1944)年10月に穂高岳白出沢で行方不明となります。

この時期に上高地に深く関わった画家としては安井曾太郎がいます。安井は昭和13(1938)年から16年にかけてたびたび上高地を訪れ、名作「霞沢岳」「焼岳」など

を制作しました。安井は一水会の創立会員であり、安井を慕う一水会の画家たちが、それ以降上高地を訪れるようになりました。その中でも加藤水城は上高地に入り浸り、四季を通じて風景を描いています。

北アルプス周辺の山小屋でしばしば目に触れるのは畦地梅太郎の木版画です。

赤沼淳夫氏は、昭和32（1957）年に田淵行男と一緒に涸沢ヒュッテを訪れた際、食堂に飾られていた一つ目の山男が描かれた手拭いを見て強烈な印象を受けます。赤沼氏はその作者が畦地であることを知ると親しく付き合いようになり、経営する山小屋に畦地の版画を飾り、さらにラベル、マッチ、ペナント、暖簾など山小屋の各種デザインを依頼しました。そうしたことから上高地や周辺の北アルプスを訪れる登山者の眼にふれるようになっていきました。



畦地は素朴な視点で自然を抽象化し、また純朴な山男像を描きます。そうした造形は、山岳景観や登山のイメージを象徴的に表現するところとなり、上高地や北アルプスを訪れる人々に愛されています。

畦地梅太郎「圏谷に立つ山男」
(あとりえ・う蔵)

(6) 上高地を題材とした音楽

上高地の春は、アルプホルンのファンファーレで幕を開けます。上高地には音楽が似合います。自然に囲まれた上高地では、かつては上高地音楽祭や涸沢音楽祭が回を重ねてきました。平成11（1999）年の上高地音楽祭では、浅春の上高地を題材としたダークダックスの「上高地の春」がうたわれました。

また、上高地の景勝は、たくさんの歌にうたわれてきました。安曇平で広くうたわれている「安曇節」にも、「槍を下れば 梓の谷に 宮居涼しき 神垣内（かみこうち）」とうたわれています。この「安曇節」は、松川村の医師・榛葉太生が、仕事唄や盆踊り唄などが次第にうたわれなくなったことを嘆き、大正12（1923）年の夏に、こうした唄を採集して新しくまとめあげたものです。歌詞を広く地域から募ったため、今ではその数が増え、安曇節の歌詞は松川村教育委員会に保存されているものだけでも5万首を超えます。

旧安曇村（現松本市安曇）では、平成2（1990）年のふるさと創生事業で、文化の創造として「郷土の歌づくり」を行い、村歌「ふるさとは輝いている」、「安曇村音頭」、「上高地旅情」の3曲を作りました。「安曇村音頭」は、安曇節とともに盆踊りの中心となっています。

地元の大野川小・中学校の校歌にも「焼岳さては上高地 梓の水もはてしない さあこの広さ豊かさを 常に理想と誇らしく 宇宙の世紀ひらけみな 大野川お、安曇大野川」とうたわれています。松本市の小中学校でも、特別名勝上高地の構成要素となる象徴的な山々をうたった校歌は多く、槍ヶ岳や穂高連峰をうたった校歌は8曲あり、北アルプスの峰々にまで広げると32校と半数以上にのぼります。

山を愛する人たちも、上高地をうたっています。まず触れなければならないのが、旧制高等学校や大学の山岳部の学生らによって作られた部歌などです。中でも、最も人口に膾炙し

たのが「アルプス一万尺」ではないでしょうか。

「アルプス一万尺 小槍の上で アルペン踊りを さあ踊りましょ」というフレーズは、多くの人が口ずさんだことがあると思います。ほかに「お花畑で 昼寝をすれば 蝶々が飛んできて キスをする」、「槍や穂高は かくれて見えぬ 見えぬあたりが 槍穂高」、「名残つきない 大正池 またも見返す 穂高岳」といったところが、上高地をうたったものでしょうか。そして、この「アルプス一万尺」と先の「安曇節」には、同じ歌詞が見えます。「岩魚釣る子に 山路を聞けば 雲のかなたを 竿で指す」と「ザイル担いで 穂高の山へ 明日は男の 度胸試し」の2節は全く同じで、締めくくりの「まめで逢いましょ また来年も 山で桜の 咲く頃に」は、「安曇節」の「まめで逢いましょ また来る年の 踊る輪の中 月の世に」とよく似ています。「アルプス一万尺」は、「安曇節」の歌詞をうまくうたいこんでいるのです。

「アルプス一万尺」の歌詞は、現在29番まで知られているようですが、このすべてが同時期にできたのではないようです。もともとが、外国のメロディーに歌詞を付けたもので、言ってみれば替え歌のようなものです。安曇節が5万首と言われるように、どんどん増えていったことは想像に難くありません。その中で、「安曇節」との融合があったのではないのでしょうか。

「アルプス一万尺」は、アメリカ民謡の「ヤンキードゥードゥル」という曲に、京都大学、あるいはその前身である第三高等学校山岳部の学生が詩を付けたのではないかとされています。それは、「雪山賛歌」が、京都帝国大学山岳部の西堀栄三郎らが、アメリカ民謡の「いとしのクレメンタイン」のメロディーに歌詞を付けたという成立とよく似ているからです。「雪山賛歌」は、以後第三高等学校山岳部の部歌として歌い継がれ、昭和33（1958）年にダークダックスがうたってヒットしました。クレメンタインは、外人教師が三高の英語の時間に教えてくれたのだといえます。このように、山の歌には大学山岳部が大きく影響しています。

「アルプス一万尺」のように、特別名勝上高地の構成要素をうたった歌は、「蝶ヶ岳賛歌」、「北穂小唄」、「夏山のうた」、「信濃恋唄」、「夏山恋歌」、「冬山に眠るあいつ」、「前穂高絶唱」、「穂高に叫ぶ」、「穂高よさらば」などがあります。「穂高よさらば」は、戦後の北アルプスでうたわれ始めた歌で、1番の歌詞「穂高よさらば また来る日まで 奥穂に映ゆるあかね雲 振り返り見すれば遠ざかる まぶたに残るジャンダルム」は、登山家の芳野満彦の作詞といわれています。芳野は、17歳の時に八ヶ岳で遭難し、凍傷で両足先を失い、五文足のアルピニストと呼ばれました。昭和40（1965）年に、日本人で初めてマッターホルン北壁の登頂に成功し、新田次郎の小説『栄光の岩壁』のモデルとなりました。2番には日本三大岩壁の一つとして知られる滝谷、3番、4番にはカール地形で知られる涸沢、岳沢がそれぞれうたわれています。

(7) 生業

ア 御用杉

江戸時代、北アルプスに属する山々の信州側は、尾張藩領だった木曾御嶽山麓と奈川村を除くと、すべて松本藩有林でした。梓川流域の大野川、稻核、島々、大野田の4か村の

住民たちが杣として250年余にわたり、上高地・乗鞍一帯や霞沢等の山林を中心にして、松本藩の藩行伐採運搬事業に取り組んできました。伐採した樽木（屋根板の材料）と薪は梓川を流送し、白木は徳本峠を越えて人が背負って搬出されました。その当時、上高地には常設の杣小屋が田代、徳沢、横尾、一ノ俣等、10カ所以上ありました。

明治3（1870）年に上高地の伐採事業が中止となり、明治8（1875）年には上高地の伐採は全面的に禁止され、御用杣たちの生活様式も養蚕事業や山仕事に変わってきました。

イ 牧場の経営

明治13（1880）年7月に、南安曇郡科布村の降幡與市等14名の連名で上高地開墾の「御官山地拝借願」が提出されたが、山林局はその現実性を危ぶみ不許可としました。

明治14（1881）年12月、県は山村振興策として産育馬を奨励し、明治新政府の掲げた殖産興業の大本令が後押しをしました。上高地の平地性と水の便を考えると、未開の原野上高地での開墾試作の目論みは魅力的であり、開墾願いや鉱物の試掘願ひ等の土地借地願ひの利益獲得競争が行われました。



上高地牧場

（昭和初期、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）

明治17（1884）年、島々の上條百次郎達は、「産牛馬組合」を作り農商務省山林局から許可され、明神池付近一帯を牧場として借り受け上高地での放牧を始めました。その後、明治39（1906）年「産牛馬組合」は資本金1万円の「株式会社上高地牧場」に発展し、種付けによる品種改良と繁殖を目的として中信平の農家所有の牛馬を預かっていました。

牧場は、明治40（1907）年以降繰り返した焼岳噴火による降灰で被害を受け、逐次梓川の上流へと移動しながら営業を続けましたが、昭和9（1934）年に上高地が国立公園に指定され、登山者への危険防止、衛生上の問題もあり閉鎖されました。その間50年、上高地の風物詩でした。その施設が現在の徳澤園に引き継がれています。

ウ 温泉・旅館

上高地の旅館営業の先駆けとなったのは新村の田中耕夫等による明治19（1886）年創業の山口温泉場ですが、上高地の温泉利用の始まりは約180年前に遡ります。

徳川幕府は、前述（(1) 上高地へのルート）のように松本平から飛騨間を野麦峠越え一本としたため、松本地区では、日本海側からの海産物等が滞り住民の生活に影響が出てきました。このため、岩岡村（現松本市梓川倭）の庄屋岩岡伴次郎は、新道開削を松本藩に願ひ出、小倉村から大滝を越え徳沢・上高地を通り、焼岳北側の中尾峠を経て飛騨へ抜ける「飛騨新道」を、天保6（1835）年に開通させました。併せて文政13（1830）年、岩岡村の伴次郎は丸山七左衛門とともに、焼岳の麓の湯沢に湧き出る温

泉を利用して「上口湯屋」を開きました。飛騨新道の取締りと徴税の効率を上げる目的で、信州側には三郷村南小倉に、飛騨側には高原郷神坂にそれぞれ口留番所が置かれるくらい、一時的にはこの街道を利用する人たちが賑わいました。播隆が描いた「鎗ヶ嶽」の絵図(p.23)には、明神地区に明神一ノ池・三ノ池とともに現・上高地温泉ホテルのある場所に上口湯屋と屋形が描かれています。

しかし、万延元(1860)年5月の大暴風雨により、この街道や上口湯屋が修復できないほど被災し、人影も途絶え、飛騨側・信州側の口留番所も廃止され、わずか25年で街道としての役目を終え上口湯屋も放棄されてしまいました。

明治19(1886)年5月、新村の庄屋田中耕夫は同志7名で、上口湯屋の営業跡地の上高地開墾の願いを提出し、同年10月5カ年期の許可を得て、翌年木造平屋建て間口7間・奥行3間一棟、木造平屋建て間口2間・奥行2間半一棟を建築し「上口温泉場」の名称で営業を始めました。

田中耕夫は宮嶋友蔵と共に明治20(1887)年6月、別に官有地拝借願を木曾大林区署宛に提出するが却下され、翌年7月に再度提出し、地代20円を支払いました。明治23(1890)年11月に横山七蔵他4名は、松本小林区署宛に林地年期貸下料として20円支払います。同年12月、田中耕夫は一人で、下湯沢反別三反歩について明治24(1891)年1月～明治29(1896)年1月までの「官有地拝借継年期願い」を長野大林区署長宛に提出しました。

しかし、上口温泉場は、明治24、25(1892)年に、梓川大洪水により家屋敷や耕作地が流失するという大被害を受け、個人の財力では開発は不可能と判断し、明治27(1894)年に「上高地開墾結社」を設立して同志を集め開墾に力を注ぎました。

明治27年、上口温泉場の宿舎2棟と什器備品・開墾用器具、測量品一切、徳本峠小屋、徳本峠の道路の権利を新会社の上高地開墾結社に移し、「上高地温泉場」として営業を継続しました。その当時の地代は、年間20円でした。

しかし、上高地開墾結社になっても成績は振るわず、田中耕夫の次男・青柳堯治郎は、新会社設立のため、安曇平の県会議員、郡会議員、村会議員、村長、収入役等地方の有力者を集め、明治36年10月10日と15日に上高地温泉(株)の第1回資本金払込みを済ませ、発起人16名にて翌年1月8日に株主20名、資本金2万円の「上高地温泉株式会社」の創立総会を開催し、同月21日登記を済ませ、上高地で最初の本格的な旅館営業に乗り出しました。

10株以上が取締役、5株以上が監査役になれる権利を有し、社長：青柳堯治郎、専務：嶺山喜長太、取締役：黒岩與三郎、丸山鉄人、鳥羽善七、監査役：岩原愛策、藤森馥太郎、佐々木重雄、現地支配人：小穴辰二郎という布陣で発足しました。

明治38(1905)年上高地温泉(株)は、間口四間奥行3間(12坪)の新館一棟を完成させました。この建物には、ウォルター・ウェストンや田部重治、小島鳥水、窪田空穂・寺田寅彦、高村光太郎、智恵子、芥川龍之介等多くの著名人が宿泊し上高地の体験談を紀行文として書き、多くの達人に上高地の魅力を紹介しました。

明治40(1907)年3月上高地温泉(株)の越冬番人伴野幾次郎夫婦が、冬期間誰も訪れる人もいない旅館の番人小屋で死亡していたという悲しい出来事があり、以後越冬番人

の希望者がいなくなりました。上高地温泉(株)は明治42(1909)年3月に、3株の株主だった清水屋旅館(島々)の加藤惣吉を管理人として経営委託します。当時の規模は木造平屋建て客室間口6間・奥行き6間一棟、木造平屋建て客室間口9間・奥行き5間半一棟、木造平屋建て倉庫間口3間・奥行き2間一棟、什器備品等一切でした。

上高地温泉(株)と清水屋旅館の関係は、出資している資本家が上高地温泉(株)で、名大すなわち宿銭をとって、その収入をあてにした営業主が島々の清水屋旅館という間柄でした。

明治40年後半になると日本人の山岳に対する登山熱は徐々に高まり、鶴殿正雄は上條嘉門次の案内で明治42年8月15～16日にかけて前穂高岳～奥穂高岳、北穂高岳、槍ヶ岳の初縦走を成功させます。冠松次郎は明治43(1910)年7月、上高地温泉(株)に宿泊し、宿泊料は二食・昼弁当付きで24銭、ガイド料は一日50銭と記録しています。

明治44(1911)年4月12日～14日にかけて辻村伊助は徳本峠越えで上高地に入り貴重な冬の写真20枚を撮影しました。

明治45(1912)年4月上高地温泉(株)は、岩魚留小屋の払下げを受け営業を始めます。

登山も練成登山と呼ばれる軍事色の強い形態に変わり、大正5(1916)年東久邇宮殿下、大正9(1920)年には北白川宮殿下、朝香宮殿下等が上高地に宿泊し国民に登山する意義を示しました。

旧制高校生や大学登山部による積雪期登山や岩登りなどスポーツとしての近代登山の時代となり、その後、登山者も増加し次々と旅館や山小屋が建てられ、今日の旅館・施設が出揃い山の魅力を伝えています。

大正12(1923)年秩父宮殿下が槍ヶ岳登山のため上高地に入山、上高地温泉(株)では1階に客間3室と専用のお風呂、調理場、2階に客間3室と畳を敷きつめたトイレを備えた新館一棟を造り殿下をお迎えしました。そして登山家が上高地を数多く訪れる様になり、山の魅力を紀行文に綴り世間に広めました。

上高地温泉(株)は、現在の上高地温泉ホテルと上高地ルミエスタホテルにつながっています。



上高地温泉ホテル
(昭和初期、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵)

エ 環境・美化等

全国の国立公園などでは、昭和30年代中頃から観光客によるゴミのポイ捨て問題が深刻化し始め、国立公園管理員が中心となり、行政機関や団体・事業者が協力して美化清掃活動が開始されました。その先駆けとなったのが上高地です。「上高地を美しくする会」は、昭和38(1963)年6月に会員数45名で発足し、年10回の一斉清掃を始め、啓発ポスターの作成、山岳清掃パトロールなど、精力的に活動を始めました。昭和41(1966)年には「上高地地区運営協議会」が設置され、山岳部を含めた清掃活

動やゴミ籠の設置、美化袋配布、美化キャンペーンなどの実施とともに、公衆便所の清掃や汲取り、公園施設の整備・補修などを行ってきました。昭和49（1974）年には「上高地を美しくする会」と「上高地地区運営協議会」が合併し、活動は更に活発になりました。

昭和54（1979）年に、財団法人自然公園美化管理財団（現一般財団法人自然公園財団）が設立され、7月には上高地支部が事業を開始し、翌年には、「上高地を美しくする会」に入会しています。

本地域では生ごみと可燃物は各施設で焼却することで減量化が図られましたが、排煙や灰の処理で問題が発生していました。平成13（2001）年、小型焼却炉のダイオキシン規制により設備基準が強化され、上高地で収集されたごみは、山小屋のゴミも含めてすべて上高地から搬出して処理するようになりました。

また平成4（1992）年には、上高地特定環境保全公共下水道施設が完成し、バスターミナル横に水洗化された公衆トイレが整備されたのを皮切りに、トイレの建替えが行われ、美しくする会と自然公園財団が行う清掃と維持管理により、常に清潔で快適な状態が保たれるようになりました。



昭和40年代の清掃活動（一財）自然公園財団提供

(8) 発電

梓川水系は標高差が大きく水量が豊富であることから、各種産業の発展に伴う電力需要の増大により、大正時代後半から昭和初期にかけて水力発電所が次々と建設されました。

昭和3（1928）年に梓川電力(株)により建設された霞沢発電所は、前年の昭和2（1927）年に大正池の池尻に堰堤を築造し、ここから隧道により7キロメートルほど下流の沢渡へ導水して発電しています。この工事に伴う資材運搬用道路として当初の釜トンネルが開通しました。

大正池は、大正4（1915）年6月6日の焼岳噴火による泥流が梓川を堰き止めて形成されました。この年5月に小さい噴火があり、泥流が下堀沢を流下し、梓川を堰き止めて小さい湖が出現しました。6月6日午前7時30分頃、上高地で連続3回の地震があり、3回目の地震時に大音響とともに、旧火口より下の中堀沢に大亀裂が生じ、数個の火口から噴煙・泥流が噴出し、流下した泥流が梓川を越えて霞沢岳の麓に衝突し、はね返ったほどの勢いで、梓川を堰き止めました。大正池を堰き止めた泥流は最も薄いところで2.5メートル、長さ330メートルでした。翌日には、堰き止めた地点から長さ1,700メートル上流に至る大正池が出現しました。

更に大正15（1926）年の豪雨により中堀沢で大崩壊が発生し、押し出した土石流が再び梓川を堰き止めたため、池が拡大して上流にまで及び、現在の上高地温泉付近までが大正池となりました。

昭和3年からは、霞沢発電所建設に伴い築造された堰堤によって、人工的に水位を調整するようになっていきます。

大正池は、上高地の景勝地として多くの観光客や登山者に親しまれています。しかし、当初は約71万立方メートルの容量を有していた大正池も、支川から流出する土砂が本川の上高地平坦部に堆積することにより河床が上昇し、池は縮小し水深は減少していきました。昭和初期には二千数百本あったといわれる池の中の枯木も消え、往時の景観は失われています。昭和51（1976）年には、当初の9分の1相当の約8万立方メートルまで容量が減少し、そのまま放置すると大正池自体が消滅するとともに、霞沢発電所の調整池としての機能も損なわれることが懸念されるようになりました。

このため、昭和52（1977）年から観光シーズンを終えた冬期に、東京電力(株)（現東京電力パワーグリッド(株)）がポンプ浚渫船による堆積土砂の浚渫工事を実施しています。毎年の浚渫量は、昭和52年から昭和63（1988）年までは3万立方メートル程度、平成元（1989）年以降は1～2万立方メートル程度です。平成25（2013）年度末までに累計約75万立方メートルの土砂が搬出され、池の容量は約12万立方メートルまで回復しました。この浚渫作業により、大正池は現在の姿を維持していると言えます。

なお、大正池の池尻に設置された堰堤は、建設当時から幾度もその姿を変えています。当初は木製の堰でしたが、昭和28（1953）年には出水時に自動で倒伏する鋼製自動起伏堰に改良されました。この鋼製自動起伏堰は昭和37（1962）年に焼岳噴火により流失してしまったため、その後しばらくは流失後の復旧が容易な土堰堤としましたが、平成15（2003）年からは空気の圧力で起伏させることができるゴム引布製起伏堰へと改良し、現在に至っています。



木製堰堤（個人蔵）



鋼製堰堤（個人蔵）

(9) 上高地帝国ホテル

昭和2（1927）年に選定された「日本新八景」の溪谷部門に上高地が選ばれると、上高地は全国的な人気を集めるようになり、昭和3（1928）年には国の名勝及び天然紀念物に指定され、昭和9（1934）年には上高地を含む北アルプス一帯が中部山岳国立公園に指定されました。

長野県は、当時「夏の山の銀座」と呼ばれた上高地を日本アルプスの観光拠点として位置付けようと、国際的に通用するホテルの建設を計画しました。昭和7（1932）年、信州

を旅行中の帝国ホテル会長大倉喜七郎に石垣倉治県知事が面談し、大蔵省の融資により長野県が上高地にホテルを建設するに当たり、帝国ホテルにその建設と運営を要請しました。

当時、昭和3年の霞沢発電所建設に伴う大正池からの導水管建設工事のため、釜トンネルが開通し、資材運搬路が大正池まで延びているだけでした。このため、帝国ホテルは、長野県が釜トンネルからホテル建設地まで自動車が行き来できる県道を開設することを条件にホテルの建設と運営を受託しました。

昭和8（1933）年に、長野県への大蔵省の融資25万円と帝国ホテルによる什器備品費用5万円の計30万円により、木造3階建（プラス屋階）、延床面積3,219平方メートル、客室46室の「上高地ホテル」が建設されオープンしました。設計は高橋貞太郎が担当しました。高橋は宮内庁や前田利為侯爵邸のほか、新大阪ホテル、川奈ホテル、志賀高原温泉ホテル、赤倉観光ホテル、戦後の帝国ホテル第1新館、第2新館、本館など



建設当時の帝国ホテル
(昭和8年、『帝国ホテル百年史』より)

の設計に携わっています。長野県は道路整備に着手し、昭和8年に大正池まで、昭和10（1935）年には河童橋までバスが乗り入れるようになりました。

その後、昭和11（1936）年に「上高地帝国ホテル」と名称が変更となり、昭和26（1951）年に長野県から帝国ホテルに払い下げられました。老朽化のため当初の建物は昭和52（1977）年に改築され、鉄筋コンクリート造、地下1階地上4階建、延床面積4,907平方メートル、客室75室となりました。

赤い屋根、丸太を組んだ山小屋風の外壁、1階の腰周りや煙突に自然石を貼り付けた建設当初の外観は、スイスアルプスを思わせるデザインであり、その後の上高地の建造物の基調となった感があります。戦後の改築された建物も、鉄筋コンクリート造ではありますが、外装、内装の仕上げ材は、木造のイメージで統一されており、外壁の腰周りは自然石を用いています。



帝国ホテル絵はがき
(市立大町山岳博物館蔵)

上高地帝国ホテルを運営する帝国ホテルは明治23（1890）年の開業ですが、開業当時は外国賓客の接遇、宿泊という国家的使命を担っていました。それ故、帝国ホテルの料理は西洋料理特にフランス料理が基本となっています。この上高地帝国ホテルの洋食が、その後の上高地の宿泊施設での食事に影響を与えています。

上高地観光のスタートと同時に設置された、上高地帝国ホテルの建造物や食事を始めとする様々な仕様は、上高地における山岳リゾートの方向性を示すものとして、現在までそのイメージがあらゆる面において承継されています。

(10) 写真などから見る上高地の昔の景観

上高地は、日本を代表する山岳地であるとともに、3,000メートル級の山々からなる景観も雄大であり、毎年多くの観光客や登山客が訪れています。

来訪の目的も様々であり、残されている絵画や版画、写真には上高地の様々な景観が写されています。以前はカメラ等の撮影器具が高価であり、現在ほど発達していませんでした。そのため、現在に残る過去の写真は厳選されているものが多く、作成に時間のかかる絵画や版画はなおさら、厳選された景観が描かれています。

今回収集した絵はがき、版画、写真について、写真の写された地点や絵画を描いた地点（以下、「撮影地点」という。）を特定するとともに、撮影され、描かれた景観を平成27年から28年度に確認しました。収集資料は表4に、各資料の撮影地点を図5に示します。

集めた資料のうち、戦前に撮影された何点かの資料について見てみましょう。



写真1 河童橋と五千尺ホテル（「上高地河童橋と五千尺旅館」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）



写真2 河童橋と穂高連峰（「穂高連峰（河童橋より）」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）

河童橋についてあげてみると、写真1のように河童橋を中心に写し、その向こうに五千尺旅館（現五千尺ホテル）が写っている写真があります。吊り橋の様子がよくわかります。

写真2では、穂高連峰、梓川とともに河童橋が写されています。この他にも明神岳に焦点をあて、河童橋、梓川とともに写された写真もありました。このように、河童橋の写真は、橋そのものの写真だけではなく、背景の山と橋の下を流れる梓川とともに写されている写真があります。現代においてもこの構図の写真が本や雑誌などでよく見かけます。



写真3 上高地ルミエスタホテル前にて（「上高地清水屋ホテル前にて」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）

写真3は、上高地清水屋ホテル（現上高地ルミエスタホテル）前で撮影された写真です。右側には2階建ての木造建物があり、左側には植栽が写されています。植栽の方を向いた浴衣姿の3人が一列に並んでおり、その背後にも人がたたずんでいます。



写真4 上高地温泉ホテル（「上高地温泉ホテル」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）

写真4は、上高地温泉ホテルを写したもので、ホテル周辺の立地環境が写されています。梓川のほとりにあり、裏には山が迫っています。

このように、山や川など自然を中心に写した写真だけではなく、建物を対象とした写真もあります。



写真5 焼岳(大正池より)（「焼岳（大正池より）」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）



写真6 焼岳(大正池より) (「焼岳(大正池より)」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵)

写真5、写真6はどちらも焼岳、大正池を撮影したものです。

写真5は立ち枯れの木が手前にあり、大きく強調され、写されています。その下には大正池が広がり、背景の焼岳は大きく写されています。

写真6では少し小高い地点から撮影され、立ち枯れの木々は奥に並び、その下に大正池が写されています。左側には大きな樹木が立ち、写真5とは違った雰囲気のある写真です。

枯れ木の違いなど構図は異なりますが、大正池とそこにある立ち枯れの木々、そして大正池をつくり出したともいえる焼岳が一緒におさめられています。



写真7 田代池と穂高連峰 (「穂高連峰(田代より)」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵)

写真7は、田代池から穂高連峰を写したものです。今は湿原化してしていますが、かつては池が広がっていたことがわかります。



写真8 ウェストンレリーフ（「戦前のウェストン像」、百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵）

写真8はウェストンレリーフを写したもので、写真にはこのような記録用と思われるものもあります。戦前のレリーフは四角形でしたが、昭和40年に円形に生まれ変わりました。



絵はがき1 梓川と焼岳（「梓川の清流と焼岳」、松本市立博物館蔵）

絵はがき1は、絵ではなく写真です。写真6や写真7と同じく焼岳を写していますが、大正池ではなくその上流の梓川から写されています。写真の中心は、手前にある川の水面と奥にそびえる焼岳であり、川の西岸の樹林も写されています。



絵はがき2 関四郎五郎「秋の六百山」（「上高地風景集」より、松本市美術館蔵）

絵はがきには、絵はがき2のような絵画もあります。六百山を描いたもので、写真に比べて、上高地の東側にあるあまり知られていない山も描かれています。このほかにも、霞沢岳を描いた絵はがきも存在します。



版画1 加藤大道版画(穂高連峰と小梨) (松本市安曇資料館蔵)

版画1は加藤大道による版画で、穂高連峰と新緑の木々、小梨の木が描かれています。田代池付近からの眺望と推定されます。版画の下に描かれているのは田代池でしょうか。現在は湿原化してしまい、このような景色は見られません。険しい山岳景観というより、上高地の和らいだ景観が描かれ、その魅力が伝わってきます。

以上のような版画、絵はがき、モノクロ写真などあわせて34枚について調査しました。4つの視点から特徴や相違点をまとめたものを以下に記します。

〈撮影地点〉

版画、絵はがき、モノクロ写真の撮影地点で資料を分類し、その結果を表1にまとめました。総数は34枚です。

撮影地点は大正池周辺、田代池周辺、田代橋周辺、河童橋周辺、小梨平周辺に集中しています。

版画、絵はがき、モノクロ写真の枚数で考えると、最も多いのは大正池周辺でした。また、写真の構図の種類が多かったのは田代橋周辺でした。

表1中の項目「方角」は、撮影地点からどの方角を向いたときに写された、描かれたものなのかを示しています。ホテルや橋など建造物のみを写している場合は、「一」と記載します。

〈写された景観〉

それぞれの写真・絵画に写された景観の要素（以下「景観要素」という。）を整理したものを表2に示します。

穂高連峰（明神岳含）、梓川が最多の12枚、その次に焼岳、大正池、枯れ木が10枚と

表1 撮影地点から見た写真の分類

場所	方角	主な視対象	撮影地点(地点ごとの枚数)	枚数		構図
大正池周辺	北	穂高連峰、焼岳	①(3)、②、③、④(5)	10	10	4
田代池周辺	北東	穂高連峰、明神岳	⑤(2)、⑥	3	5	3
	西	焼岳	⑦(2)	2		
田代橋周辺	北東	穂高連峰	⑧、⑨	2	7	7
	西	焼岳	⑩	1		
河童橋周辺	—	—	⑩、⑫、⑬、⑭	4	5	5
	南	六白山	⑮	1		
	北	穂高連峰	⑯、⑰、⑱	3		
小梨平周辺	—	—	⑲	1	7	5
	北	穂高連峰、明神岳	⑳、㉑、㉒、㉓	4		
明神池周辺	南西	焼岳	㉔	1	2	2
	—	—	㉕、㉖	2		

続いています。また、ホテルや河童橋などの建造物も撮影等の対象とされています。

表3の景観要素とその組み合わせの数を見ますと、その構図で最も多いパターンは山と池を写したもので、13枚ありました。そのうち、大正池が10枚、田代池が3枚でした。圧倒的に大正池の方が多いことがわかります。次に多かったのが、山と川を写したもので、11枚ありました。その中で、建造物を含んだものは2枚でした。

山と池を写したもののの中で、穂高連峰を写したものは9枚、焼岳を写したものは6枚でした。山と川を写したもののの中では、焼岳を写したものが4枚、穂高連峰を写したものが5枚、明神岳を写したものが2枚ありました。川の場合も池の場合も、焼岳と穂高連峰を写したものはほぼ同数であることがわかります。

表2 景観要素と写真の枚数

景観要素	枚数	景観要素	枚数
穂高連峰(明神岳含)	12	小梨平	2
梓川	12	上高地温泉ホテル	2
焼岳	10	清水屋ホテル	2
大正池	10	公衆便所	1
枯れ木	10	ウェストン碑	1
明神岳のみ	3	六百山	1
河童橋	3	明神池	1
田代池	3	明神養魚場	1

表3 景観要素とその組み合わせごとの数

構図	景観要素の組み合わせ	枚数	総数
山+池	焼岳と大正池と枯れ木	6	13
	穂高連峰と大正池と枯れ木	4	
	穂高連峰と田代池	3	
山+川	焼岳と梓川	4	11
	穂高連峰と梓川	3	
	穂高連峰と梓川と河童橋	2	
	明神岳と梓川	2	

※総数が1以下は省略

〈時期による整理〉

ア モノクロ写真（大正末期～昭和初期）

過去のモノクロ写真18枚のうちでは、穂高連峰、梓川が含まれるものが4枚と最も多い結果となりました。また、河童橋やホテルなどの建造物を撮影したのも多く、上高地のイメージには、河童橋やホテルが含まれていたことがわかります。

景観要素の組み合わせでは、穂高連峰と梓川と河童橋、焼岳と大正池と枯れ木がそれぞれ2枚ずつ撮影されていました。

イ モノクロ絵はがき（写真／不明）

1枚しか撮影地点を確認できず、焼岳と梓川を写したものでした。

ウ 加藤大道の版画（昭和18～昭和25年頃）

加藤大道の版画11枚のうち、版画に写された景観の要素をみると、焼岳、梓川、大正池が同数で、最も多い景観要素でした。景観要素の組み合わせで見ると、焼岳と大正池を描いたものが最も多く、次に明神岳と梓川、焼岳と梓川、穂高連峰と大正池と枯れ木の組み合わせが多いという結果でした。

エ カラーの絵はがき（絵画／昭和42年頃）

絵はがき4枚では、景観要素をみると、大正池や枯れ木を描いたものが最も多い結果でした。景観要素の組み合わせで見ると、同じ構図が複数枚あるものはありませんでした。また、六百山など、版画やモノクロ写真には見られない景観要素もありました。

〈撮影された時期の違い〉

上記のア～エを比べてみると、全体で一致する特徴として、梓川、穂高連峰、焼岳、大正池、枯れ木が景観対象とされていることが多いという点が挙げられます。

しかし、河童橋やホテルといった建築物を対象としているものは、戦前に撮影された、アのモノクロ写真しかありませんでした。また、エのカラー絵はがきにおいては、上高地を代表するような穂高連峰や焼岳だけではなく、六百山などを含め、上高地の景観を幅広く写しています。

このように、上高地で撮影された景観要素は、穂高連峰、焼岳、大正池、梓川など、現在でも代表的な景観でした。川の流れや木々の違いはありましたが、現在でも撮影地点では視界が開け、ベンチを設置しているところもありました。

版画や絵にはなく、写真にだけ河童橋やホテルが撮影されていました。そのほかにも、公衆便所なども撮影されていたことから、「きれいな景色」としてだけでなく、記録用に撮影されていた場合もあったのではないかと考えられます。

記録する媒体が絵や版画と写真とでは何かしら異なっています。それは、集めた枚数が少なかったせいかもしれません。また、考察が不十分で、明確にできなかったのかもしれませんが。今後、さらに写真や絵画を集め（まだまだありそうです）、分析することにより、上高地の評価された景観に関し、戦前からの変化を探っていきたいと思います。そのことにより、現代に至るまでの多様な評価を明らかにし、上高地の景観保護の基礎的な資料として充実させたいと考えています。

表4 調査結果一覧

場所	写真の枚数	写真の年代	*文献、タイトルなど *備考欄
①	3	昭和22年～昭和25年頃	1枚目 *加藤大道版画：102大正池の雷雨T *低いベンチあり
		大正末期～昭和初期頃	2枚目 *写真：穂高連峰(大正池より) *低いベンチあり
		昭和20年代～40年代頃	3枚目 *絵はがき(上高地風景集、市立美術館蔵)：穂高と大正池 *低いベンチあり
②	1	昭和22年～昭和25年頃	*加藤大道版画：101(初期作品-大正池)T *河原、ベンチなし、説明用の看板あり
③	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：焼岳(大正池より) *橋の上から撮影。ベンチなし。今は視界良くない
④	5	昭和22年～昭和25年頃	1枚目 *加藤大道版画：？
		昭和22年～昭和25年頃	2枚目 *加藤大道版画：初冬上高地(焼岳)T
		昭和22年～昭和25年頃	3枚目 *加藤大道版画：信州上高地(焼岳と大正池)T
		昭和20年代～40年代頃	4枚目 *絵はがき(上高地風景集、市立美術館蔵)：焼岳
		大正末期～昭和初期頃	5枚目 *写真：焼岳(大正池より)
⑤	2	大正末期～昭和初期頃	1枚目 *写真：穂高連峰(田代より) *ベンチあり
		昭和18年頃	2枚目 *加藤大道版画：上高地(穂高連峰/新緑/小梨)T
⑥	1	昭和20年代～40年代頃	*絵はがき(市立美術館蔵)：上高地の明神岳 *ベンチなし、看板あり。田代湿原から撮影。
⑦	2	不明	1枚目 *絵はがき(市立博物館蔵)：上高地梓川の清流と焼岳 *中洲より撮影
		昭和22年～昭和25年頃	2枚目 *加藤大道版画：上高地(焼岳と梓川/秋・夕暮れ)T
⑧	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：穂高連峰(田代橋より) *中洲より撮影
⑨	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：温泉ホテル・清水屋ホテルと穂高連峰
⑩	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：公衆便所(中の瀬)
⑪	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：焼岳 *ベンチ無し
⑫	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：上高地温泉ホテル *ベンチ無し、離れた場所にベンチ有り
⑬	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：上高地清水屋ホテル前にて *ベンチあり
⑭	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：戦前のウェストン像 *近くにトイレ有、ベンチなし
⑮	1	昭和20年代～40年代頃	絵はがき(上高地風景集、市立美術館蔵)：秋の六百山
⑯	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：穂高連峰(河童橋より)
⑰	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：穂高連峰(河童橋より)
⑱	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：上高地河童橋と五千尺旅館
⑲	1	昭和22年～昭和25年頃	*加藤大道版画：上高地(穂高連峰と梓川/新緑)TT *ベンチあり
⑳	1	昭和初期～昭和22年頃	*加藤大道版画：上高地の月(明神岳と梓川)T *ベンチあり、道は広い、砂利道
㉑	1	昭和22年～昭和25年頃	*加藤大道版画：上高地の月(焼岳と梓川)T *ベンチあり
㉒	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：明神池(小梨平より)
㉓	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：上高地(小梨平キャンプ) *イス有り
㉔	1	昭和22年～昭和25年頃	*加藤大道版画：上高地ノ景(明神岳/冬)T *ベンチあり
㉕	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：明神池 *明神、棧橋
㉖	1	大正末期～昭和初期頃	*写真：明神養魚場

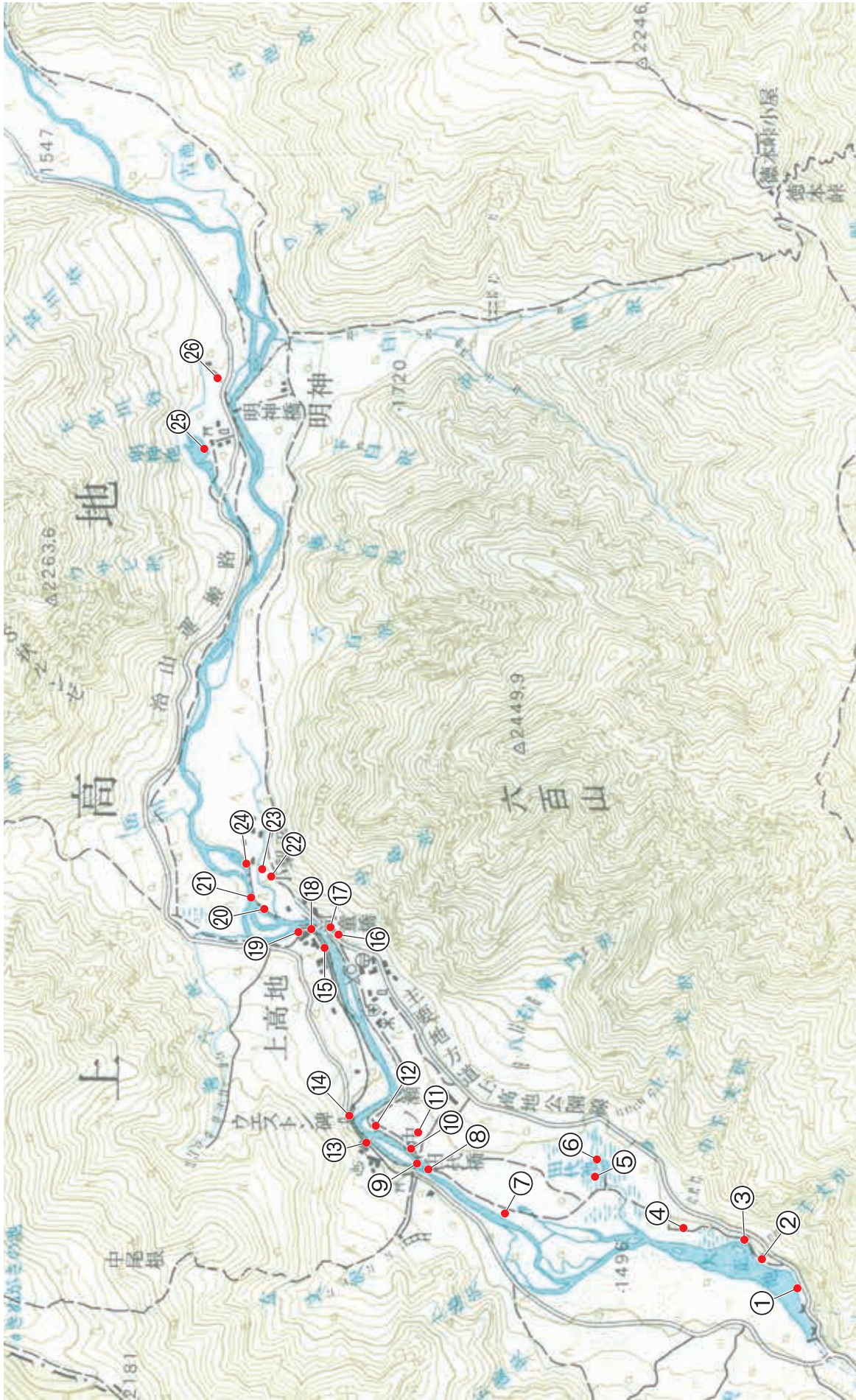


图5 摄影地点位置

(11) 保護政策

近代における上高地の景観や植物の保護については、『安曇村誌 第3巻』によると、明治42（1909）年8月に、農商務省山林局の長野大林区署長が安曇小林区署などに高山植物の採取禁止を通達したのが始まりです。

大正5（1916）年には、更に、山林局が上高地一帯10,907ヘクタールを学術参考保護林に指定しています。その目的は、保護林台帳に以下のように書かれています。「永ク原生状態ヲ保存シテツハ国土上ノ保安ヲ計リーツハ高山植物ノ保護學術又ハ森林施業上ノ考証ニ資スルト為ス」

このように、上高地は保存する価値のある森林のある場所として扱われることになりました。

大正8（1919）年に史蹟名勝天然記念物保存法が制定されました。史跡、名勝、天然記念物を、開発などの破壊から守るための法律です。上高地は、昭和3（1928）年には名勝及び天然記念物に指定されています。保存すべき上高地の説明文には、本計画書の始めに引用しているように、景観の素晴らしさや、ケショウヤナギ、そして高山植物などの植物の豊富さ、多数の鳥類のことなどが書かれています。

昭和2（1927）年に、大阪毎日新聞と東京日日新聞の両者主催、鉄道省後援により、「日本新八景」が選定されました。8部門で日本を代表する景観が選定されたのですが、その渓谷部門では上高地が選定されています。

昭和6（1931）年に国立公園法が制定され、昭和9（1934）年に上高地を含む北アルプスが中部山岳国立公園として指定されました。

戦後になると、昭和27（1952）年に、特に価値が高いものとして、特別名勝及び特別天然記念物に指定されています。

4 土地所有

本地域の面積は11,326.59ヘクタールで、その大部分は国有地（林野庁所管地、環境省所管地）です（表5、図6）。

表5 土地所有別面積

所有別	国有地		民有地
	林野庁所管地	環境省所管地	社寺有地
面積	11,240.58ha	80.66ha	5.35ha

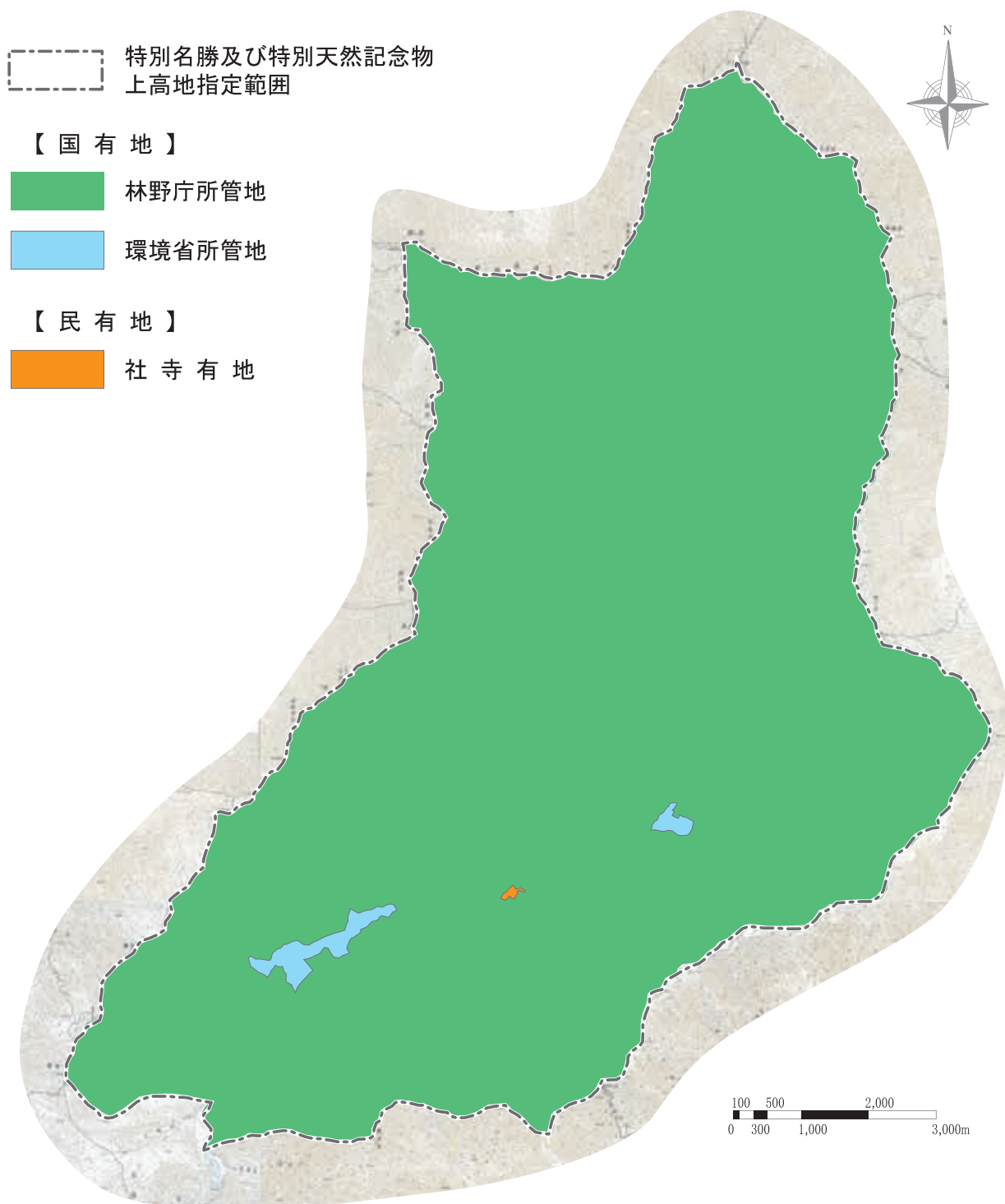


図6 土地所有位置

5 法規制

(1) 国立公園

国立公園とは、我が国を代表するすぐれた自然の風景地の保護と利用の増進を図り、もって国民の保健、休養、教化に資するとともに、生物の多様性の確保を目的とする制度です。

同一の風景型式中、我が国の景観を代表するとともに、世界的にも誇りうる傑出した自然の風景であることを要件に環境大臣が指定します。

本地域は全域が国立公園に指定されており、特別保護地区、第2種特別地域として、図7に示す範囲が指定されています。

特別保護地区	公園の中で特にすぐれた自然景観、原始状態を保持している地区で、最も厳しく行為が規制される。
第2種特別地域	農林漁業活動について、つとめて調整を図ることが必要な地域

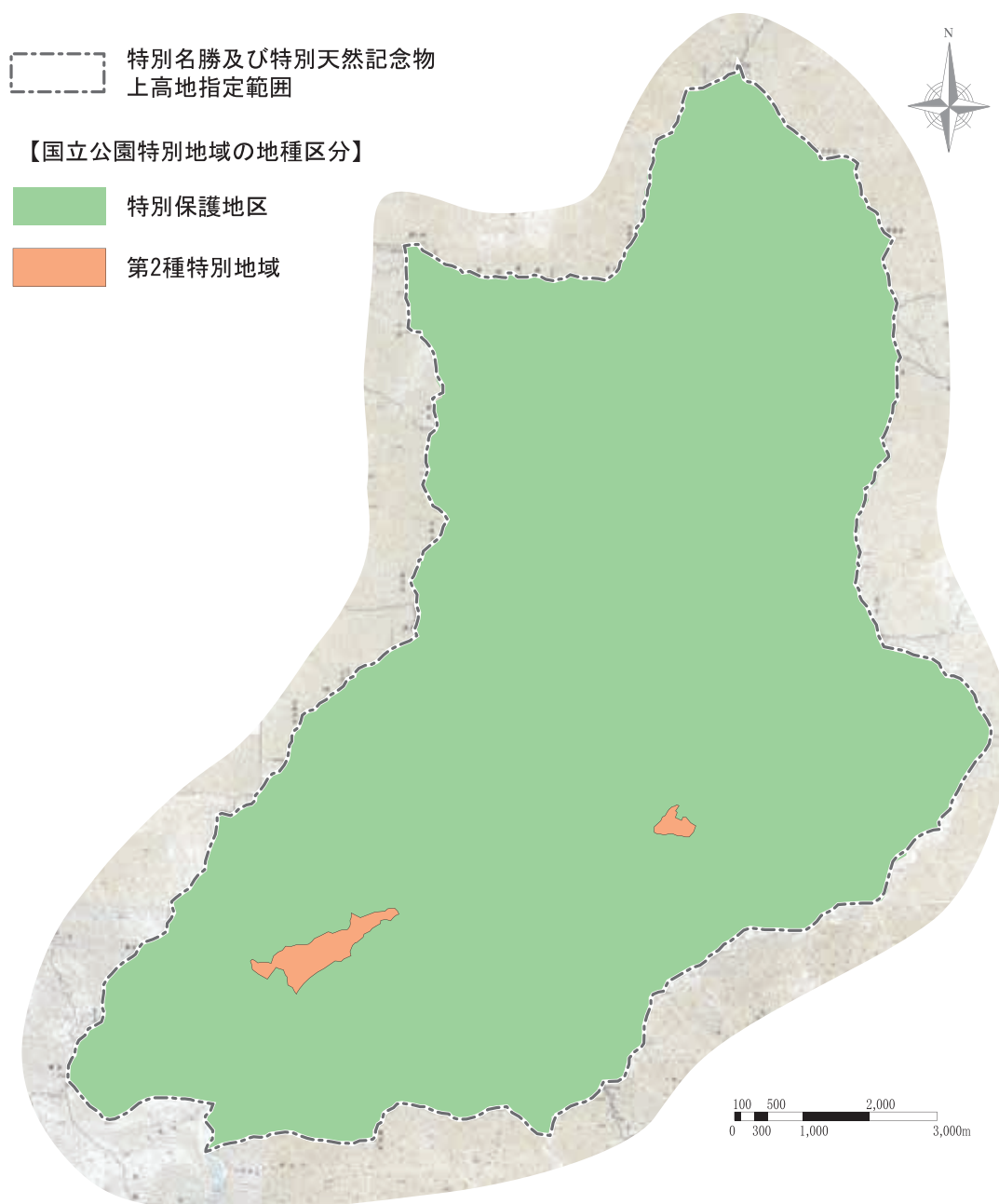


図7 国立公園

(2) 保安林

保安林とは、水源のかん養、災害の防備、生活環境の保全・形成等、特定の公共目的を達成するため、農林水産大臣又は都道府県知事によって指定される森林です。

それぞれの目的に沿った森林の機能を確保するため、立木の伐採や土地の形質の変更等が規制されます。

本地域では水源かん養保安林、水源かん養保安林及び保健保安林として、図8に示す範囲が指定されています。

水源かん養保安林	水源地の森林が指定される。その流域に降った雨を蓄え、ゆっくりと川に流すことで、いつも平均した川の流れを保ち、安定した水の確保に効果を発揮する。また、洪水や渇水を防止する。
保健保安林	森林レクリエーションの活動の場として、生活にゆとりを提供する。また、空気の浄化や騒音の緩和に役立ち、生活環境を守る。

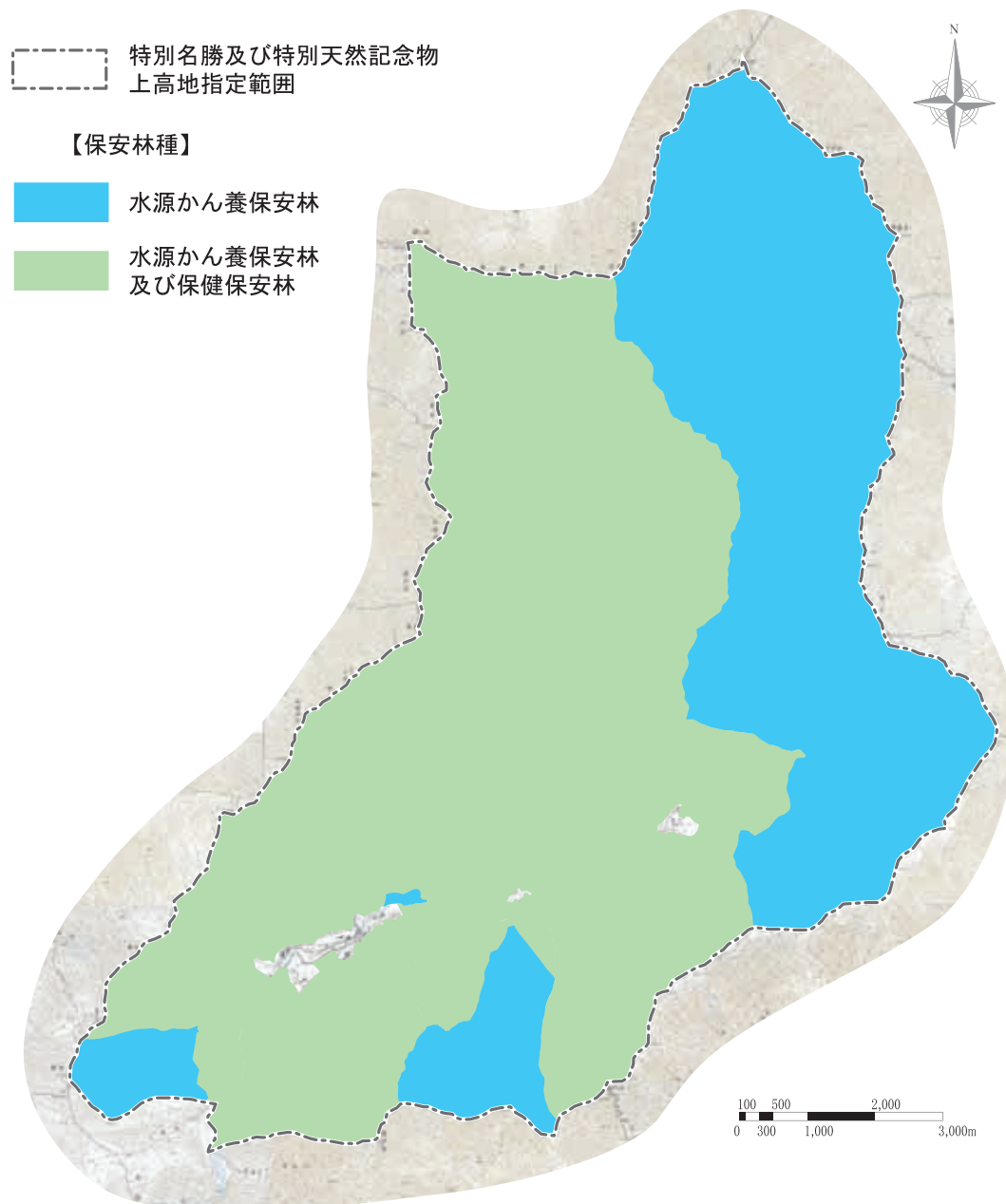


図8 保安林

(3) 砂防指定地

砂防指定地とは、国民の生命・財産を守るために砂防堰堤等を設置するため、又は当該区域で行われる一定行為の禁止若しくは制限を行う区域として、法律により国土交通大臣が指定した区域です。

盛土、切土等の土地の形状変更、施設や工作物の新築、改築等、立竹木の伐採、抜根、土砂の採取等には、都道府県知事の許可が必要です。

本地域では直轄施工区域、県所管区域として、図9に示す範囲が指定されています。

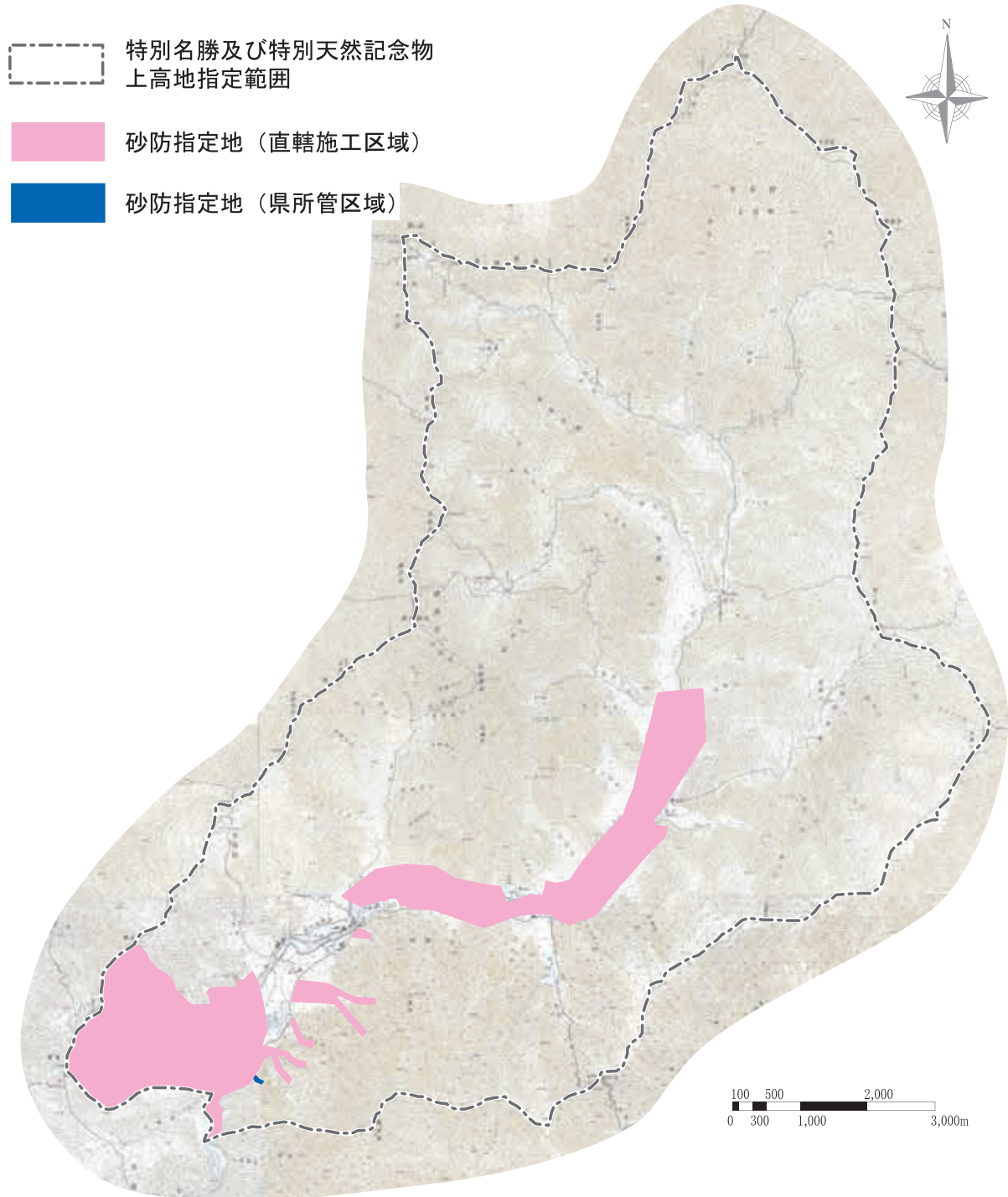


図9 砂防指定地

(4) 鳥獣保護区

鳥獣保護区とは、鳥獣の保護繁殖を図ることを目的として、「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）」に基づいて環境大臣又は都道府県知事が指定する区域です。一般に、環境大臣が指定したものを国指定鳥獣保護区、都道府県知事が指定したものを県（都道府）指定鳥獣保護区と呼んでいます。

区域内では鳥獣の捕獲が禁止され、特別保護地区では工作物の設置、水面の埋立、立木の伐採等には環境大臣又は都道府県知事の許可が必要です。

本地域は、全域国指定鳥獣保護区（北アルプス鳥獣保護区）に指定されており、そのうち特別鳥獣保護地区として、図10に示す範囲が指定されています。

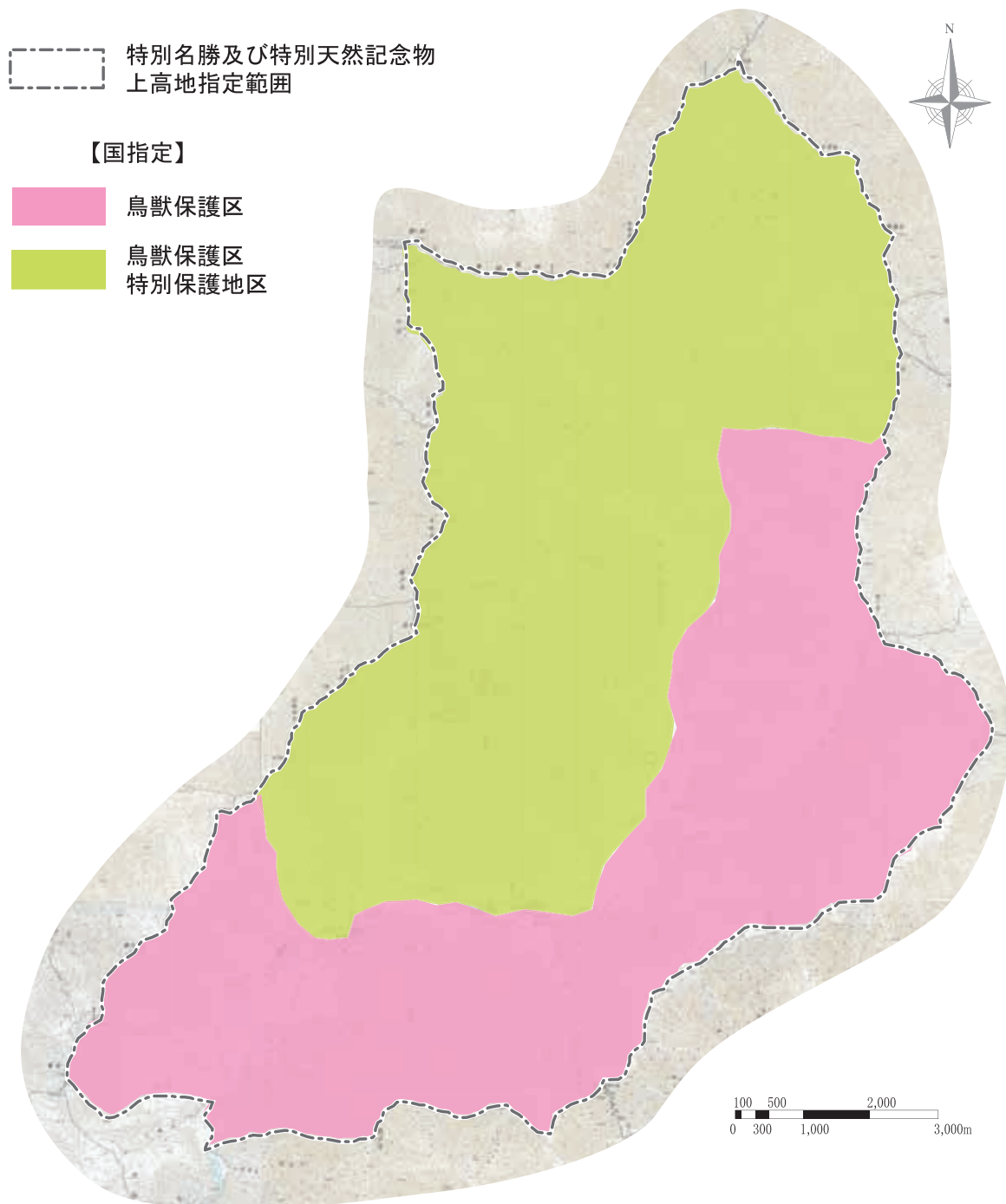


図10 鳥獣保護区

6 指定地内の文化財等

本地域には国登録有形文化財として、嘉門次小屋囲炉裏の間、旧上高地孵化場飼育池・物置があり、その他、岩小屋等文化財として重要な施設があります。また、本地域外ですが、関係する重要な施設として、国登録有形文化財である徳本峠小屋休憩所があります。

(1) 国登録有形文化財

ア 嘉門次小屋囲炉裏の間

嘉門次小屋は、近代登山の歴史に重要な足跡を残した上條嘉門次に由来する山小屋です。嘉門次は、明治13（1880）年から明神池の畔の小屋に住み、猟や漁などを営む傍ら、山に関する豊富な知識を生かしてウォルター・ウェストンや小島烏水ら、著名な登山家の山行に山案内人として同行した人物であり、登山ガイドの先駆けとして数多くの文献に登場します。



嘉門次小屋囲炉裏の間

嘉門次小屋は、嘉門次から代々受け継がれてきました。山小屋としての経営は、大正14（1925）年頃から始めたと言います。現在の建物は、利用者の増加などに合わせて段階的な増築を経てつくられたものであり、最も古い部分が囲炉裏の間です。囲炉裏の間は、南北に長い配置の嘉門次小屋の北端に位置しており、木造平屋建て、梁間2間4尺×桁行3間の規模の建物です。東側に入り口があり、内部は入り口に面して土間があります。その奥に板敷の床が設けられており、中央には大きな炉が設けられています。壁は板壁で、屋根は切妻形式、石置きの板葺です。

近代登山の普及以前、上高地は人々が食材や建材などの山の恵みを得る場でした。そのため、上高地には、嘉門次のような山を生業の場とする人々が数多く生活していました。こうした人々が住んだ小屋の記録には、屋内に炉が設けられた1間の建物が広くみられます。かつて嘉門次の住んだ小屋もまた、2間×2間半の規模で屋内に5尺四方もある大きな炉が設けられていたことが記録されているように、屋内に炉が設けられた1間の建物でした。今に残る囲炉裏の間は、大正時代に再建されたものであると考えられますが、かつて嘉門次が住んだ小屋の面影を今に伝えており、嘉門次に代表される山を生業の場とした人々が近代登山の文化を受容してきた歴史を物語るとともに、近代登山の普及以前から山の中で育まれてきた建築の変わらぬ姿を伝える重要な建築遺構であると言えます。

イ 旧上高地孵化場飼育池・物置

上高地には、山の恵みを利用して、畜産や養殖などが行われた歴史があります。旧上高地孵化場は、こうした上高地の歴史の一側面を伝える施設の代表例です。

長野県は、大正時代から昭和時代のはじめにかけて、各地に孵化養魚施設を建設し、水産業の発展を目指しました。大正14（1925）年に開設された上高地孵化場もその一つです。上高地孵化場では、梓川の清流を利用して、大正14年から昭和8（1933）

年まで、イワナの孵化放流、ヒメマスやブラウトラウトなどの移殖放流が行われました。昭和13（1938）年に明科町の魚類増殖場を拡充して水産指導所が発足すると、各地の孵化養殖施設は順次地元の漁業組合に移譲され、上高地孵化場も昭和14（1939）年に安曇漁業組合へ無償で移譲されました。その後、平成19（2007）年に安曇漁業協同組合の施設を信州大学が譲り受け、信州大学山岳科学総合研究所（現信州大学山岳科学研究所）の上高地ステーションとなり、上高地における研究拠点として利用されています。

上高地孵化場の建設に関する記録は、『上高地孵化場工事書』（昭和4年・長野県立歴史館蔵）としてまとめられています。この史料によると、現存する飼育池（第一号池・第二号池・第三号池・第四号池）と物置は、昭和4年に事務所や孵化室とともに一体的に建設されたことがわかります。飼育池は、明神池に合流する天然の水系から取水し、またもとの水系に排水することができるようになっており、地場の石を計画的に使い分けた巧みなつくりの石積みで構成されています。物置は、木造平屋建て、梁間2間×桁行3間の規模で、素朴な立ち姿の建物です。ともに建設当初の姿をよく保っており、上高地孵化場の往時の様子を伝える貴重な建築遺構であると言えます。



孵化場飼育池と物置
（昭和初期・松本市立博物館蔵）



現在の上高地ステーション観察池・別館

ウ 徳本峠小屋休憩所

上高地へ入るためのかつての本道は、島々から徳本峠を経て上高地へと至る登山道でした。特に徳本峠からの眺望は、ウェストンが絶賛したように、古くから登山者をひきつけてやみません。徳本峠小屋は、この素晴らしい眺望を有する徳本峠に位置する山小屋であり、その歴史は大正12（1923）年に上高地温泉(株)によって開設されたことに始まると言います。



徳本峠小屋（平成22年改築後）

徳本峠小屋の建物は、これまで、度重なる増改築と平成22（2010）年の改築を経て、現在の姿に至りました。休憩所の部分は、徳本峠小屋の当初の建物であり、平成22年の改築に当たっても、徳本峠小屋の歴史を物語る貴重な建物として、建て替えることなく保存が計画されました。休憩所は、木造平屋建て、梁間2間半×桁行

3間の規模の建物です。壁は板壁で、屋根は切妻形式、石置きの板葺です。登山道に面した西側には売店が設けられており、南側に入り口があります。内部は入り口に面して土間があり、その奥に板敷の床が設けられています。平屋建てですが、内部は3層になっており、より多くの登山者が休泊できるように工夫されています。

休憩所には、これまでの増改築の履歴を物語る多くの痕跡を確認することができます。これらの痕跡から建物の原形を復元すると当初、2層目と3層目はなく、L字型に土間が通り、板敷の床には炉が設けられていたと推定されます。こうした屋内に炉が設けられた1間の建物は、近代登山の普及以前から山を生業の場とした人々が住んだ小屋の記録にも広くみられることから、近代登山の普及以前から山の中で育まれてきた建築を多分に参照する中で休憩所が建設された過程が推測されます。一方、休憩所に残る多くの痕跡は、近代登山の普及に伴う増改築の歴史を伝える物証でもあります。こうした痕跡を残す休憩所は、近代登山の普及以前から山の中で育まれてきた建築が、近代登山の普及に伴って変容してきた過程を伝える重要な建築遺構であると言えます。

(2) その他の重要施設等

ア 岩小屋と石室の遺構

近代登山の普及とともに木造の山小屋が建てられる以前には、山の厳しい自然から登山者の命を守る岩小屋や石室と呼ばれる石造の山小屋が、登山者の休泊場となっていました。岩小屋は、構造が天然の大岩そのもので、その下にできた空間に人の手が若干加えられてできた原初的な姿の構築物のことを言います。一方、石室は、石を積んで壁をつくり、その上に木材で屋根を組んだ構築物のことを言います。岩小屋と石室は、石を主な構造の材料とした石造の構築物であるという点で共通しますが、構造となる石が天然のものか人工のものかという点で異なります。

(7) 岩小屋

近代登山の普及以前から、岩小屋は信仰や生業のために利用されていました。古いものでは、文政11(1828)年に槍ヶ岳を開山した播隆上人が参籠した「坊主の岩小屋」の遺構が知られています。この他、上高地には、近代登山の黎明期の山行記などに記録のある「赤沢の岩小屋」、「横尾の岩小屋」の遺構を確認することができます。



坊主の岩小屋

涸沢から奥穂高岳に至る登山道付近には、今も現役の岩小屋があります。「フカスの岩小屋」と呼ばれるこの岩小屋は、3つの大岩が柱となり、その上に広さ約5.7メートル四方、厚さ1.4メートルほどの大岩がのり、屋根となっています。柱となる3つの大岩の間には、石が積まれて壁が築かれています。壁には、南側に入出口が設けられており、東側と北側に窓が設けられてい

ます。内部は3坪ほどの広さで、床は板敷き、屋根となっている大岩の下面が天井となっており、床から天井までの高さは1.3メートルほどです。

フカスの岩小屋の屋根となっている大岩は、別の岩小屋（「涸沢の岩小屋」か）が雪崩で押し流されてきたものであると言います。この他にも、遺構の確認には至りませんが、「殺生の岩小屋」と呼ばれる獵小屋の存在が山行記などに記録されています。近代登山の普及とともに山小屋が続々と建設されていく一方、岩小屋は徐々に利用されなくなっていきましたが、天然の大岩をそのまま利用した姿は、山の中で育まれてきた建築の一つの原形を物語るとともに、近代登山の黎明期における登山者の休泊場の様子を今に伝えています。



フカスの岩小屋



赤沢の岩小屋

(大正2年、アレクサンダー・グーセツフ撮影、絵はがき、個人蔵)

(イ) 石室

上高地には、二ノ俣と槍ヶ岳（坊主の岩小屋付近）に石室の遺構を確認することができます。二ノ俣には二つの遺構があり、そのうちの一つは、南安曇教育会によって建設された石室のものです。石積の規模は間口15尺×奥行15尺、高さ6尺ほどです。この場所には、「本會ノ石室建設ノ企ヲ賛シ豊科町丸山盛一氏ハ此建設費全部ヲ寄附セラル 大正六年十月十五日 南安曇教育會」と刻まれた石柱がたてかけられており、この石室が大正6（1917）年に豊科町の丸山盛一の寄付をうけて建設されたことがわかります。この石柱と同じ内容が刻まれた石柱がババ平の槍沢キャンプ場にあります。かつて、この付近にも南安曇教育会によって建設された石室がありました。現在、その遺構を確認することはできませんが、キャンプ場の石積の一部に遺構が転用された可能性もあります。



二ノ俣の石室

(大正後期～昭和初期、絵はがき、市立大町山岳博物館蔵)

手前:長野県による建設(大正8年) 奥:南安曇教育会による建設(大正6年)

一方、二ノ俣のもう一つの遺構と槍ヶ岳（坊主の岩小屋付近）の遺構は、長野県によって建設された石室のものです。大正8（1919）年、長野県の臨時県会におい



槍ヶ岳の石室
長野県による建設（大正8年）

て、山に関する研究の促進を目的に、白馬岳、鑓ヶ岳（後に爺ヶ岳に変更）、大黒岳、二ノ俣、槍ヶ岳、乗鞍岳、赤石岳、東駒ヶ岳、八ヶ岳、岩菅山の10カ所へ石室を建設することが議決されました。この事業の中で建設された石室は、石積の規模が梁間2間4尺×桁行4間（小さなものは3間）、高さ6尺、中央に4尺幅の土間を通し、その両側に板敷の床を配するものでした。二ノ俣のもう一つの

遺構と槍ヶ岳（坊主の岩小屋付近）の遺構の規模もこれと一致します。

遺構を確認することのできるこれら3つの石室は、山を現場とした教育研究と関連して建設されたものではありませんが、勿論、登山者にも広く開かれ、休泊場として利用されてきました。既にどれも木材で組まれた屋根は失われ、壁の石積だけが往時の姿をとどめますが、これらの遺構は、山の中で育まれてきた建築の一つの類型を物語るとともに、近代登山の普及によって山へと向けられた教育研究のまなざしを今に伝えています。

イ 河童橋

河童橋は、明治時代に架けられた^{はね}刎橋が始まりと言われますが、いつから「河童橋」と言われているのか、刎橋がいつ架けられたのかは定かではありません。その後、何度か架け替えられ現在の姿に至ります。

河童橋は、シーズン中は常に観光客で賑わい、梓川と穂高連峰あるいは焼岳を背に写真撮影をする姿がよく見られ、そこからの景色は写真だけでなく絵画や絵はがきにも残されています。また、古い写真等を見ると、かつてウェストン夫妻もこの橋の上で写真撮影するなど、橋自体を写したものも多くあります。

河童橋の架け替え年（『安曇村誌第3巻』「上高地関係年表」p631～638による）

- ① 年代不明 刎橋が架けられる。
- ② 明治43年 吊り橋に架替え
- ③ 昭和32年 架替え
- ④ 昭和50年 架替え
- ⑤ 平成 9年 架替え

※『安曇村誌』の年表には記載がありませんが、『上高地3 河童橋考』（上條武著、独木書房）によると、昭和5年に架け替えられ、現在の吊り橋は5代目とされています。



勿橋
(河野齡蔵撮影、絵はがき、個人蔵)



大正末期～昭和初期の吊り橋
(百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵)



昭和初期の吊り橋
(百瀬藤雄撮影、松本市立博物館蔵)



昭和32年～昭和50年の吊り橋
(個人蔵)



昭和50年～平成9年の吊り橋
(個人蔵)



現在の吊り橋

ウ モニュメント

(ア) ウェストンレリーフ

ウォルター・ウェストンは、明治29（1896）年に『日本アルプス 登山と探検』を出版、日本アルプスを世界に紹介しました。その日本の登山界に尽くした功績を称え77歳の喜寿を祝って日本山岳会が作製し、昭和12（1937）年にはめ込まれました。太平洋戦争中、一旦取り外され東京虎ノ門の日本山岳会に保管されていましたが、昭和22（1947）年に再び埋め戻され、昭和40（1965）年に、円形の現在のレリーフに生まれ変わっています。



(イ) 嘉門次碑

上條嘉門次は、幼い頃から父に従って上高地に入り、猟や釣りを生計を立てていました。明神池の畔に小屋を造り1年を通して上高地で生活し、上高地や北アルプスを熟知していたことから、山案内人として多くの登山者を案内しました。中でもウェストンの槍ヶ岳・前穂高岳登頂の案内役として有名です。昭和33（1958）年に碑が建てられ、現在の碑は、平成7（1995）年5月に建て替えられました。



(ウ) 内野常次郎碑

内野常次郎は、明治17（1884）年に上宝村中尾（現高山市）に生まれ、上條嘉門次に弟子入りして猟や山の生活を教わりました。一年を通じて上高地で生活するようになり、山案内人としても実力を備え、昭和2（1927）年には秩父宮殿下が穂高岳から槍ヶ岳の縦走を行った際の案内人に選ばれました。昭和29（1954）年に記念碑の設立が計画されましたが、一旦立ち消えとなり、昭和42（1967）年10月に地元関係者や有志により設置されました。



(イ) 山に祈る塔

昭和34（1959）年に長野県警察本部が遭難防止の願いを込め「山に祈る」と題する手記を発行したところ、大きな反響があり、全国各地から寄付金が寄せられました。この趣旨に賛同した関係機関や各種団体が合同で「山に祈る会」を結成し、昭和37（1962）年に、会により慰霊碑が設置されました。その後、平成26（2014）年に建て替えられました。北アルプス南部地区において、不幸にして遭難された方々の霊を慰め、山の安全を祈るため、毎年7月1日に慰霊祭が開催されています。



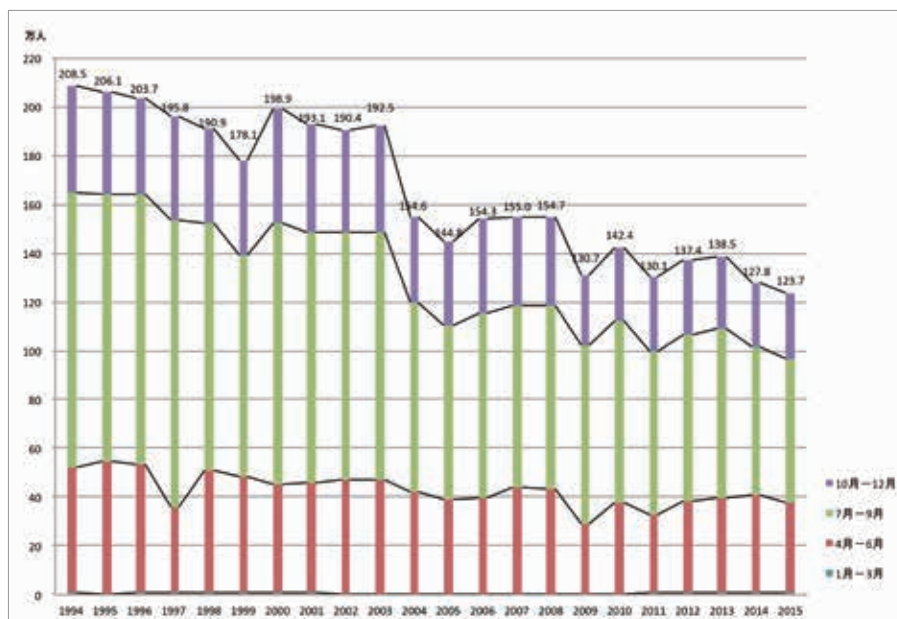
7 観光の動向

(1) 観光客・登山者の入込数

明治時代から学術探検や測量を目的とした登山が増え、学者らによる探検調査の登山も行われるようになりました。大正2（1913）年に、陸軍参謀本部の陸地測量部により北アルプスのほとんどの地形図が発行されると、登山が一般に普及するようになり、山域の登山道や山小屋が整備されていきました。大正11（1922）年には島々地区に登山案内人組織「島々口案内者組合」が結成されました。『安曇村誌』の上高地関係年表には、大正15（1926）年の島々谷からの上高地入山者は5,000人、ほとんど学生と記されています。上高地は、昭和2（1927）年以降、「日本新八景」選定、名勝及び天然記念物指定、上高地を含む北アルプスの中部山岳国立公園指定により、広く世間に知られるようになりました。昭和8（1933）年に上高地ホテル（現上高地帝国ホテル）が開設されると、大正池までバスが乗り入れるようになり、昭和10（1935）年には河童橋まで延びました。この頃から上高地に観光客が入り込むようになり、観光の時代が訪れました。戦中、終戦直後の来訪者はほとんどいませんでしたが、終戦の混乱期を過ぎると再び増加し、昭和10年頃に年間5万人と言われた来訪者は、昭和30年代になると年間10万人以上になりました。

上高地への入込数は昭和36（1961）年から数値が記録されています。昭和50年代までは年間30～40万人台を推移していましたが、昭和60年代から飛躍的に増加し、昭和60（1985）年に84万人余、昭和61（1986）年には100万人を超えるようになりました。その後、更に増加して平成6（1994）年には208万人と最盛期を迎え、平成15（2003）年までは170～190万人台を推移するようになりました。以降、漸次減少に向かい、平成21（2009）年以降は120～140万人台を推移しています。

利用は、県道上高地公園線が通行可能な4～11月が大部分を占めており、夏季の7～8月、紅葉シーズンの10月が多くなっています。平成6年以降の上高地への入込数の推移を図11に示します。



資料：松本市山岳観光課

図11 上高地への入込数の推移

(2) マイカー規制・観光バス規制

昭和40年代の奈川渡、水殿、稲核ダム建設に伴う道路改良により上高地へのアクセスが以前より容易になると、マイカーブームの影響もあり上高地に車両が押し寄せるようになりました。上高地へ入る唯一の車道である県道上高地公園線は、駐車場に入れない車両が釜トンネルまで並び大渋滞を起し、排気ガスや道路外への違法駐車による植生の破壊など、自然に対する悪影響も目立つようになりました。そのため、昭和49（1974）年に「上高地自動車利用適正化連絡協議会」が設置され、昭和50（1975）年に一般車両の通行を禁止するマイカー規制が開始されました。これにより、一般車両は沢渡の駐車場に駐車し、定期バスやタクシーに乗り換えて入山することになりました。期間は当初30日でしたが順次延長され、平成8（1996）年から通年規制となりましたが、観光バスを利用したツアーの増加や、平成9（1997）年に安房トンネルが開通し岐阜県側からの入込みが増加したこと等により、観光バス等による渋滞が激しくなり、最盛期には駐車場待ちの観光バスの列が大正池以遠まで続く状況が発生するようになりました。

平成16（2004）年からは、これまでのマイカー規制に加え路線バスを除くバスの乗入れを規制し、沢渡（長野県側）や平湯（岐阜県側）でシャトルバスに乗換えを行う観光バス規制を開始しました。平成16年は夏季の30日間、平成17（2005）年からは7～10月の特に混雑が見込まれる期間（土・日曜日を中心に海の日を含む連休、お盆期間、体育の日を含む連休）に規制を実施しました。マイカー規制、観光バス規制日数の推移を図12に示します。

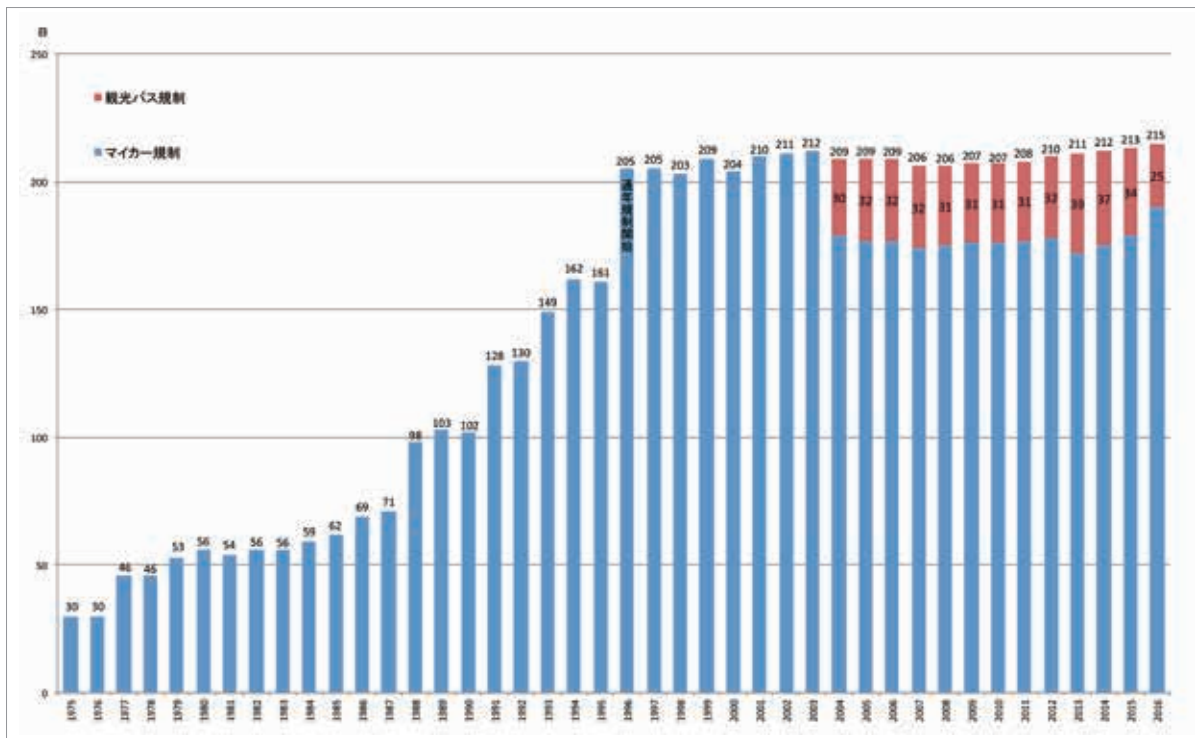


図12 マイカー規制、観光バス規制日数の推移

平成25（2013）年には環境省により沢渡ナショナルパークゲートが、松本市によりバスターミナル施設が建設されました。シャトルバスやタクシーの乗換え時に、上高地自然情報や登山情報、ルールなどの情報提供が行われています。

8 祭礼や催し

(1) 上高地開山祭 (主催：上高地町会)

冬期間通行止めとなっていた県道上高地公園線が4月中旬に開通し、上高地に春の観光シーズンの幕開けを告げるお祭りとして、昭和42(1967)年から毎年4月27日に河童橋のたもとで開かれています。アルプホルンの美しいファンファーレの後、シーズン中の山の安全と繁栄を祈願する神事が執り行われます。獅子舞や太鼓の演奏後、河童橋の中央で鏡開きが行われ、一般参加者に樽酒が振る舞われます。その後、小梨平周辺で野宴が開かれます。開山祭に訪れる観光客は毎年およそ2,000人に上ります。



(2) ウェストン祭 (主催：日本山岳会)

日本アルプスを世界に紹介し、日本近代登山の父といわれたイギリス人宣教師、ウォルター・ウェストンの功績をたたえ、毎年6月の第一日曜日に、ウェストン広場にあるレリーフの前で開催されます。

地元小学生による献花、参加者全員による黙とう、小学生の合唱に続き、詩の朗読や登山家による記念講演が行われます。前日には、ウォルター・ウェストンが通った松本市安曇島々(島々宿)を出発して徳本峠を越え上高地に入る記念山行も行われます。



(3) 槍ヶ岳播隆祭 (主催：槍ヶ岳山荘)

播隆上人は、天明6年(1786)年に越中国(現富山県)に生まれた念仏僧で、文政11(1828)年槍ヶ岳に初登頂し、阿弥陀如来、観世音菩薩、文殊菩薩の3体の仏像を槍ヶ岳山頂に安置しました。また、信者が登りやすくするために鉄鎖を取り付けるなど、その偉大なる功績を偲び、毎年9月上旬に槍ヶ岳山荘において、映画会、歌の会、講演会が行われます。

(4) 明神池お船祭り (主催：穂高神社)

明神池のほとりが紅葉に染まる毎年10月8日に執り行われるお祭りです。昭和26(1951)年から続けられている行事で、一帯が荘厳な雰囲気包みこまれる中、平安朝の衣装を纏った神主と巫女を乗せた、龍頭・鶴首の2隻の船が、雅楽の調べとともに明神池を回る神事が行われた後、穂高神社奥宮例大祭が行われます。山の恵みへの感謝と一年間の安全を祈願する古式ゆかしいお祭りが行われ、同時に北アルプスで遭難した人の慰霊祭も行われます。



(5) 上高地閉山式（主催：上高地観光旅館組合）

上高地の観光シーズンを締めくくるイベントとして、毎年11月15日に河童橋たもとにて執り行われます。穂高神社の神主による神事が行われ、シーズン中の自然の恵みに感謝し翌シーズンの安全を念願します。

(6) 山の日記念全国大会

「山の日」は平成28（2016）年に施行（平成24年制定）された国民の祝日の一つです。平成28年8月10～11日に、松本市で第1回山の日記念全国大会が開催されました。8月11日に上高地で行われた記念式典には皇太子殿下ご一家がご臨席され、式典のほか記念行事などには延べ17,300人が訪れました。



9 施設等

本地域は、原始的な自然が残る場所であるとともに、山岳登山や観光での利用も多い場所であり、利用者の快適性や安全確保のため様々な施設が設置されています。山小屋、ホテル・旅館等の宿泊施設、売店、トイレといった建築物、砂防・治山堰堤等の防災施設、車道、歩道、車道等に附帯する擁壁、側溝、落石防止用ネット、ガードロープ、案内板や標識等があります。また、指定文化財施設や歴史を物語る岩小屋や石室の遺構、モニュメント等もあり、利用者にも上高地の歴史を伝えています。

主な施設等の位置を図13から18に示します。

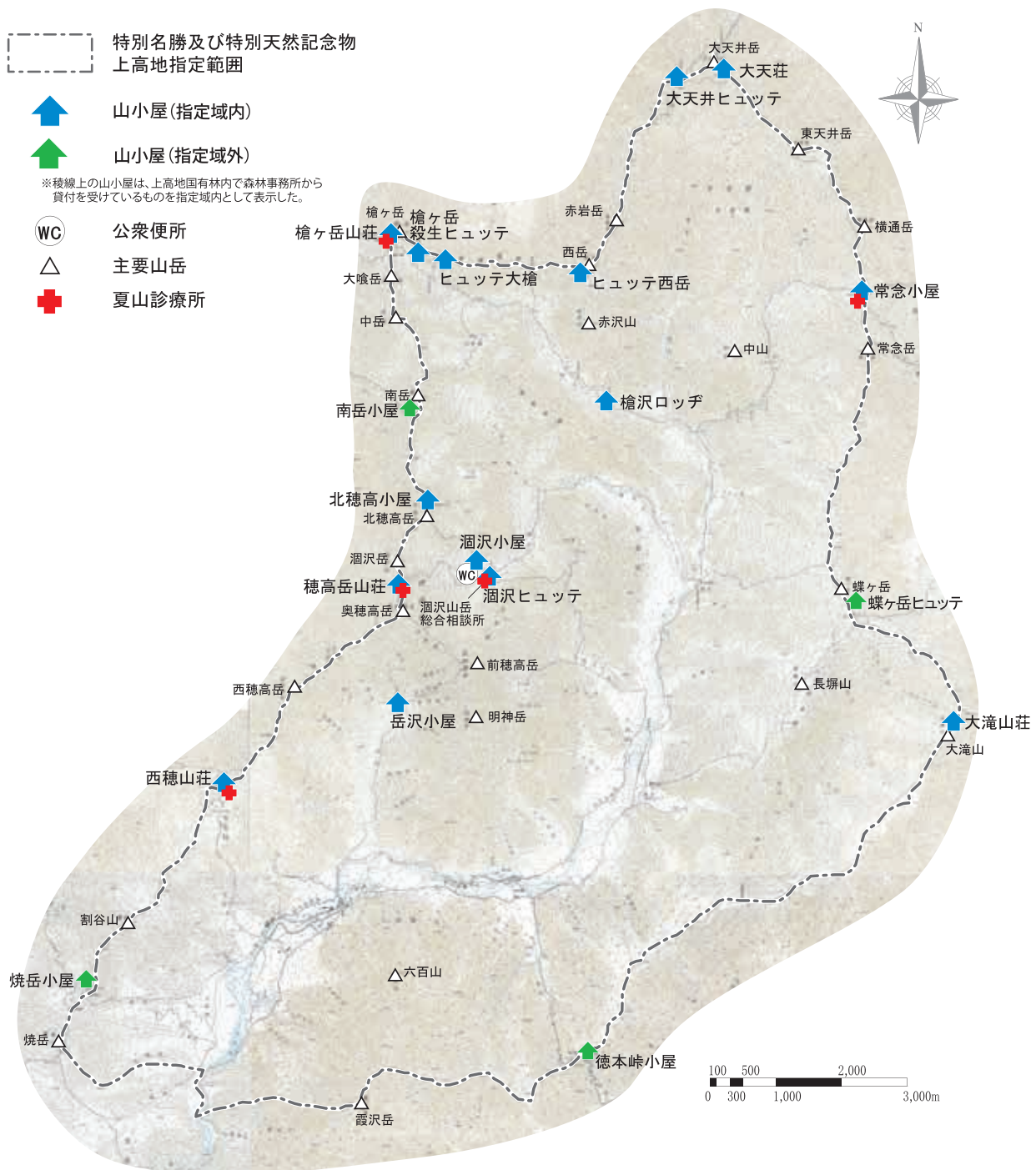


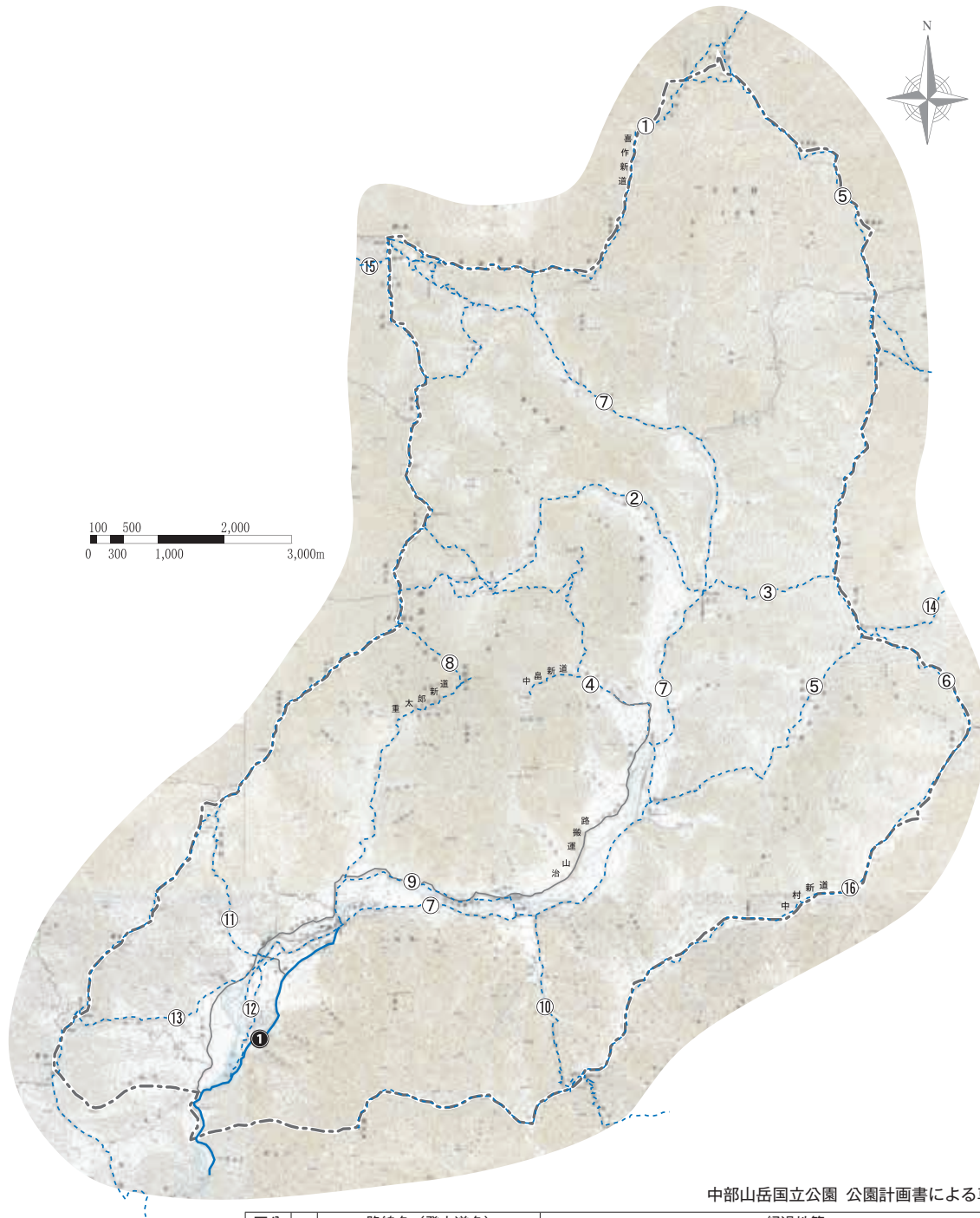
図13 山岳部の山小屋等施設の位置



図14 平坦部のホテル等施設の位置



図15 平坦部の事務所等施設の位置



中部山岳国立公園 公園計画書による車道・歩道

区分	路線名(登山道名)	経過地等
車道	① 上高地線	高山松本線道路から分岐し、上高地集団施設地区へ到着
歩道	① 中房檜ヶ岳線(喜作新道)	中房温泉から大天井岳、赤岩岳を経て檜ヶ岳へ至る登山歩道
歩道	② 横尾・穂高岳線	横尾で上高地・檜ヶ岳線から分岐し、檜穂高連峰縦走線へ到達する登山歩道
歩道	③ 横尾・蝶ヶ岳線	横尾で上高地・檜ヶ岳線から分岐し、徳沢・大天井岳線へ到達する登山歩道
歩道	④ 新村橋・潤沢線(中島新道)	徳沢で上高地・檜ヶ岳線から分岐し、横尾・穂高岳線へ到達する登山歩道
歩道	⑤ 徳沢・大天井岳線	徳沢で上高地・檜ヶ岳線から分岐し、蝶ヶ岳、常念岳を経て大天井岳へ至る登山歩道。中房檜ヶ岳線へ合流
歩道	⑥ 徳沢・大滝山線	徳沢で上高地・檜ヶ岳線から分岐し、大滝山を経て徳沢・大天井岳線へ到達する登山歩道
歩道	⑦ 上高地・檜ヶ岳線	上高地集団施設地区から徳沢、横尾、檜沢を経て檜ヶ岳へ至る登山道
歩道	⑧ 檜穂高連峰縦走線(重太郎新道)	上高地集団施設地区から穂高連峰を縦走し檜ヶ岳へ至る登山道
歩道	⑨ 河童橋明神池線	上高地集団施設地区から梓川右岸を通り明神へ至る自然探勝歩道 上高地・檜ヶ岳線へ合流
歩道	⑩ 鳥々明神線	鳥々谷から徳本峠を経て上高地集団施設地区方向へ至る登山道
歩道	⑪ 上高地西穂高岳線	上高地集団施設地区から西穂高岳への登山道
歩道	⑫ 上高地大正池線	上高地集団施設地区から大正池への自然探勝歩道
歩道	⑬ 上高地中尾線	上高地集団施設地区から新中尾峠を経て中尾温泉方面へ至る登山道
歩道	⑭ 三股蝶ヶ岳線	三股から徳沢・大天井岳線へ到達する登山道
歩道	⑮ 新穂高温泉・檜ヶ岳線	新穂高温泉から檜ヶ岳への登山道。檜穂高連峰縦走線に合流
歩道	⑯ 大滝山徳本峠線(中村新道)	徳沢・大滝山線から分岐し、徳本峠に至る登山道

図16 車道・歩道の位置

番号	所管	名称	凡例
①	松本砂防事務所	梓川本川上流床固群	○
②	松本砂防事務所	五千尺堰堤群	
③	松本砂防事務所	八右衛門沢床固	
④	松本砂防事務所	焼岳上中下堀沢砂防堰堤等	
⑤	松本砂防事務所	防災情報センター	↑
⑥	中信森林管理署	上黒沢復旧治山	○
⑦	中信森林管理署	奥又白沢復旧治山	
⑧	中信森林管理署	徳沢復旧治山	
⑨	中信森林管理署	白沢復旧治山	
⑩	中信森林管理署	六百沢復旧治山	
⑪	中信森林管理署	善六沢災害関連	
⑫	中信森林管理署	玄文沢復旧治山	↑
⑬	中信森林管理署	上高地治山事業所詰所	
⑭	中信森林管理署	横尾冬期避難小屋	↑
⑮	松本自然環境事務所	玄文沢ヘリポート	●
⑯	松本市	松本市消防団上高地消防隊詰所	↑

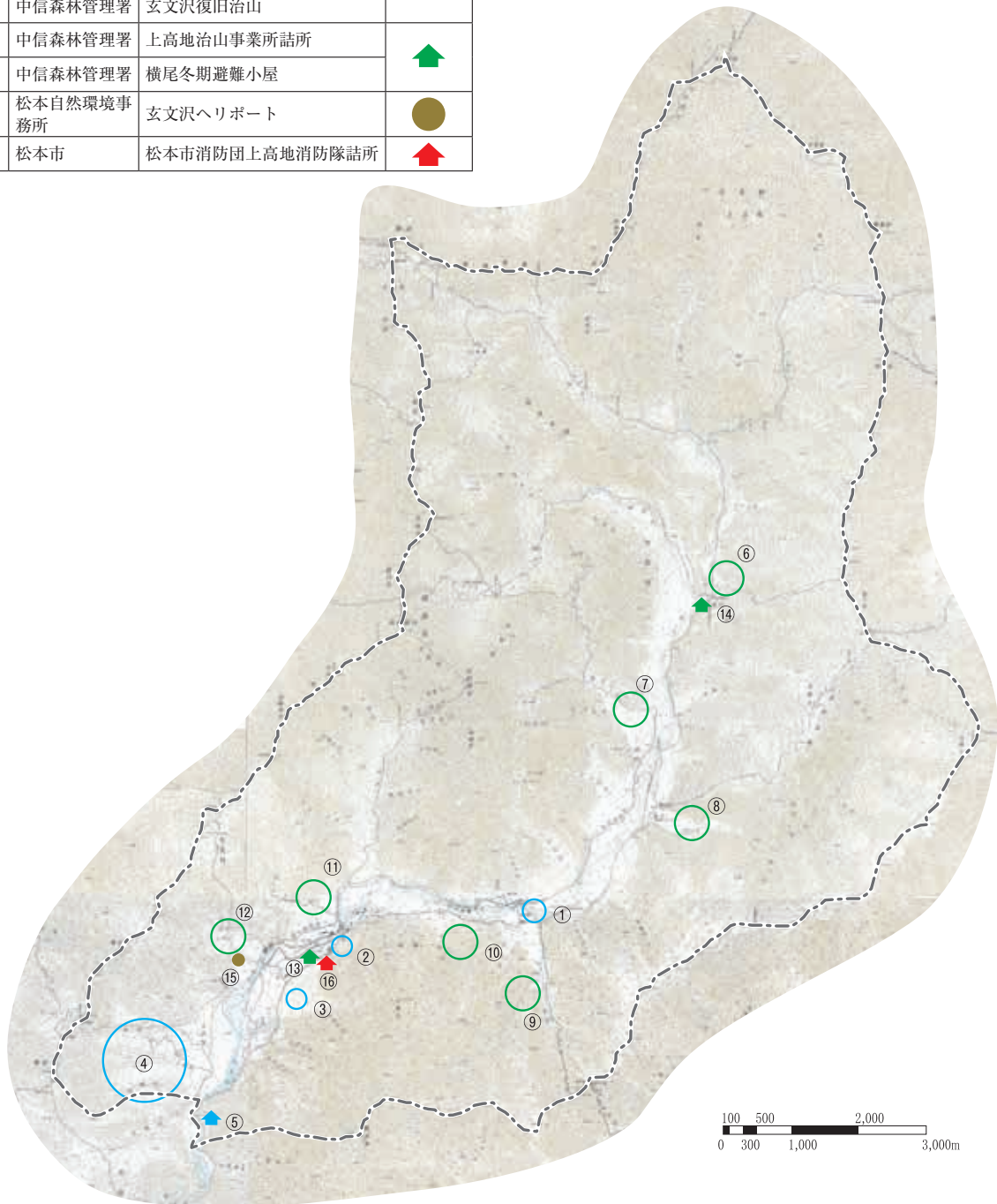


図17 防災施設の位置

国指定文化財

番号	種別	文化財の名称	凡例
①	国登録有形文化財	嘉門次小屋囲炉裏の間	●
②	国登録有形文化財	旧上高地孵化場飼育池・物置	
③	国登録有形文化財	徳本峠小屋休憩所	

その他の重要施設

番号	形態等	名称等	凡例
④	岩小屋	坊主の岩小屋	●
⑤	岩小屋	赤沢の岩小屋	
⑥	岩小屋	横尾の岩小屋	
⑦	岩小屋	フカスの岩小屋	●
⑧	石室	二ノ俣の石室（南安曇教育会建設）	
⑨	石室	二ノ俣の石室（長野県建設）	
⑩	石室	槍ヶ岳の石室	
⑪	石室	槍沢の石室（石柱のみ）	●
⑫	モニュメント	ウェストンレリーフ	
⑬	モニュメント	嘉門次碑	
⑭	モニュメント	内野常次郎碑	
⑮	モニュメント	山に祈る塔	

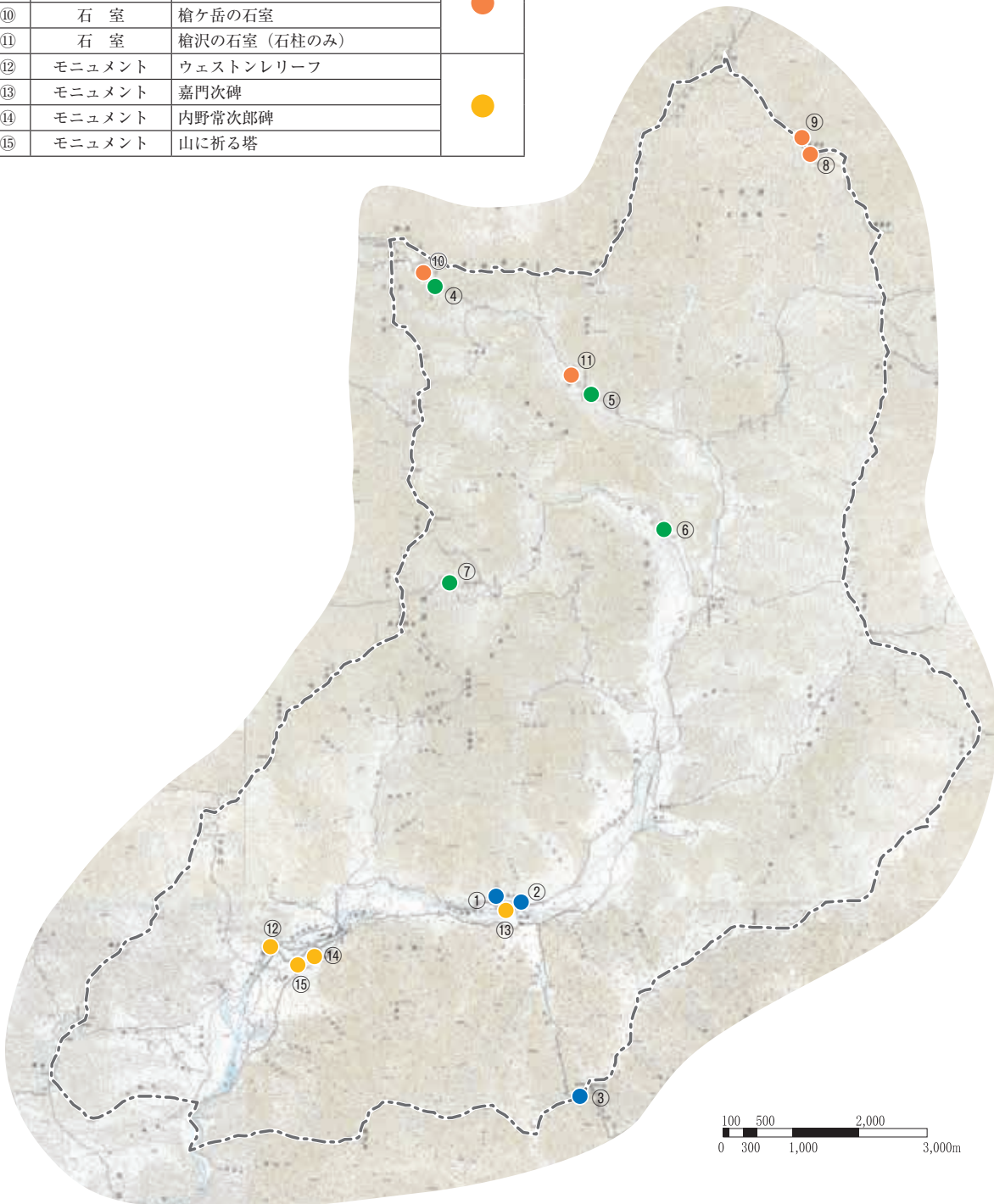


図18 文化財関連施設の位置